

いてはないと思い始めた。今まさに彼がにじり寄ろうと身を動かしたちょうどその時（誓いを破った当然の報い。しかし他方では長い間追い求め、すんでの所で達成されるどころであった切望にとっては何とも不運な妨害）、十数人もの野卑な山賊がまちまちに武装して現れた。彼らについてその他に特筆すべき事といえば、顔も身なりも風雨に曝されたままに汚れていた為、野蛮人との見事な共通点を備えているということ。そのようなならず者たちが（彼ら自身惨めなものだから他人に危害を加えることによって悪どさの度合いを高めてやろうと思い立ち）、雄叫びを上げて突進して来た。その騒ぎにパメラ姫は目を覚まし（彼女の眠りは二つの危険に曝されていたが、そのうちの一つがもう一方の危険から彼女を救う羽目となった）、ムシドロスは激しくいきり立ち、彼らに向かって身を翻したが、その顔つきは仔を盗まれた雌トラそっくりであった。

☆ ☆ ☆

村里好俊 [福岡女子大学文学部助教授] / 杉本 美穂 [九州大学大学院博士課程]  
道行千枝 [九州大学大学院博士課程] / 野上 良子 [福岡女子大学大学院博士課程]  
山崎英司 [九州大学大学院博士課程] / 岩下いずみ [九州大学大学院修士課程]

◇ 紙面の都合上、今回は〈注〉は割愛せざるを得ない。

ならば 我が姿を用いて 恋人を演じよ  
我が接吻を姫に与え 伝え給え姫の魂に  
目覚めて瞳が輝くまでは 我は生きる 漆黒の闇に

麗しきパメラ姫はこの歌に誘われて甘き眠りへと落ち、そのお蔭でムシドロスは、この上なく美しい姫の身体をじっくり眺める機会に恵まれた。ムシドロスの想像は駆け巡る。姫の美しい額は、あたかも自分のあらゆる恋の想いが熱き戦いを繰り広げる戦場。髪の本一本が自分を縛る頑強な鎖。麗しの瞼は（その時には、更に麗しい瞳を隠していたが）真珠を育む可憐な二つの宝石箱さながら。箱自体まことに豪華だが、中身は遥かに絢爛たる宝玉。頬は最も贅沢に混ざり合った美しい色で染まり、ムシドロスの眼をしばしの間うっとりさせたが、薔薇の唇は（開くときには常に最も賢明な言葉を従えているが）今は、その美の威力でムシドロスの視線を釘付けにし、どれほど愛らしく上唇と下唇が重なり合って、それぞれの美しさを結び合わせ引き立て合っていることか。唇の向こう側を、ムシドロスは空想の眼を働かせて記憶を元に思い描いた。唇の奥には、待ち伏せしているかのように、歯の軍隊が並ぶ。その全てが、最高に清らかな純白の鎧で身を包み、軍紀に則り寸分違わず整列していた。さらにその美しさが熟練の画家の筆による絵ではないかと勘違いされぬよう、柔らかい息がそこからそっと洩れており、内側に潜む馨しさの良き証となっていた。息がそっと漏れ出る様子は、まるでそれが申し分なく快適な家を離れるのを嫌がり、もう一度そのしっかりと閉ざされた楽園へ引き戻されたいと切に願っているかのように。その様はムシドロスの欲望を横暴な専制君主のごとく支配し、そのため彼は抵抗の術もなく自分の顔を姫のそれへと出来得る限り近づけ、姫の息を吸いながら内心確信するのであった、空気を糧に生きるカメレオンの暮らしをさせてもらえるのであれば、それに見合うほど素晴らしい暮らしはないだろうと。こういった美の品々の一つ一つがムシドロスの心情に大きな作用を及ぼしたのだが、それらが一丸となり連合を組むことによって生じた強大な力は、彼の意志を引きずり込んでしまい、今や例の約束も力を弱めるばかり。種々諸々の欲望に異議を唱える思慮の声は、ことごとくムシドロスの判断力にはよそ者と映り、彼はいかなる誓いであれ、せっかくの絶好の機会を逃すことに張り合えるほど強力なものは存在しないことを身をもって経験するのだった。そうして激しい歓喜の荒波に完全に打ち負かされた彼は、パメラ姫から静かに身を起こしたが、その時の彼の分別と言えれば一つ残らず己の主人にはそっぽを向き、かくも愛しい敵の肩を持つ。そういった状況の中、ムシドロスは見張りの薄さを利用して援軍が間に合う前に首尾良く砦を手中に収めるには、今この時を置

サー・フィリップ・シドニー

あの方が ああこの身の幾多の品々 結ばれるはその人に  
私の全ては常にひとつ あの方の物 そうお思い下さるのように

ムシドロス 貴方の全ては常にひとつで私の物 そう思う身に  
おお 貴方は 世の注目を浴びるよう定められた人  
そう思う身に 危険は必然 あらゆる感覚は盲に  
無謀な試み企てる イカロスの羽根で太陽に飛ぼうと

おお この僅かな力で かような軍勢に挑むなど  
到底不可能 命限りある者には 及ばぬ難関だけに  
我を貴方のものと呼び給え さすれば我 最も位高き人  
我を貴方のものと収め給え さすれば長き訴訟も終結に

貴方を我が物と真に申す者 貴方をもって他におらず  
美德の力携えて 貴方は御身自らを凌駕す  
ならばどちらも貴方の物 心を担保に取られた私の身  
褒美に出すには遥か高貴な 貴方だけの貴方の身

お互いの心が、お互いの結び付けられた思いを敏感に享受するのを許す、この効力のある戯歌をやりとりしながら、その果実を味わっていたパメラ姫は、彼女の危険な企てという難局にあたり、長いこと眠りを妨げられたので非常に眠くなってきた。ムシドロスの膝に頭を横たえたパメラ姫は、次のように優しくうたわれた彼の歌で眠りに誘われた。

鍵を掛け給え 我が心の至宝に 麗しき瞼よ  
護り給え 瞳のきらめきを 今の時代の唯一の灯なるに  
姫の香る視覚に 安らぎを与え給え 甘き眠りよ  
華奢すぎて魂の威力を支え切れぬ 姫の視覚に

ああ眠りよ 汝が姫の視線を閉ざす間に  
(その視線 愛神が絶美の矢を造る処よ)  
匿い給え 姫の身体の一部を 安らかに  
奇怪な夢で麗しき身が 脅えぬよう計らい給えよ

されどもし 夢に現れる権利を ああ眠りよ  
汝 この類い希なる美女のうちで 手放さずに  
汝自身 楽しみを得たいなら その場所に

自然の女神の誇りに包まれ 頭を天へ持ち上げる  
其方らは 大地が与える大きな恵みに加えて  
今姫が与えた恩寵から さらに偉大な恵みを受ける

我が姫は（あゝ幸せな其方達）喜んでいる  
麗しい手で 柔らかな其方の皮を刻みつけて  
其方らを用い（あゝ幸せな其方達）姫は伝える  
心を貫くその言葉 他の想いでは描けまいて

されど松よ許しておくれ 姫に比べて価値なきこの手  
姫の香る想いが宿る其方に我が熱き想いを綴る  
姫を思慕するこの心から 其方は一体いかにして  
ひたすら姫に仕えんと 待ち侘びる想いを奪い取る

我が想い 最初に彫られし姫の想いよりも高邁  
と我は呼びたい（たとえ囚われの想いとて）  
完全に姫だけの 虜になった我が想い  
低きより身を興しながら 至高へ向いて  
その徳で 高邁の極みに達した姫の想い  
もはや墮するより他に道はない

一方、木陰に座り、下に咲いているきれいな花で花束を作りながら、パメラ姫は天上の調べのような甘いささやきでムシドロスの耳をみたした。その響きは、彼がかつて一度も耳にしたことがないものであったので、既に彼女に心を射止められていたとはいえ、新たな一撃が、堅固な砦という彼の心に加えられたように思えた。そのことを表わし、さらに彼女の甘い調べに応じて、彼は静かだがうっとりさせられる音色で、詩の数節を歌った。次に掲げるのはパメラ姫の歌で、ムシドロスの返歌がそれに続く。

パメラ 色とりどりの花 美しさは様々なのに  
素敵な色の衣で 地面を飾る  
それぞれ 持ち前の形留めたままに  
ひとつの姿にまとまるや ひとつの美景が生まれ出る  
この想いもそれと同じ 心はそれを糧に生きている

私の内側もそれを映す外側も また同様  
それぞれ異なる働きをしているのに  
ひとつにしっかり結ばれ ひとつの美しき的に向かう

姫は食事をするより森の木々の下を散策するほうがずっと楽しく、樹木の表皮にムシドロスとパメラの名を書きそれを互いに結んだりして心地よい時を過ごしていた。時として、その二人の名は交差してパメドロスやムシメラといった名を表した。そんな二十余りの悩み多くとも闊達な空想の花々を紡いだが、そけとて多少の我慢をすることでかなり制限されていたのである。そして他の木立ちよりも一層目を引いたある樹木に、自らの大切な想いをこれらの詩にして委ねるのであった。

蔑まないで あぁ 真っ直ぐに伸びた松の樹幹  
其方に傷をつけながら 私は想いをここに刻むの  
私の想いは 真っ直ぐな其方と同じで一直線  
其方と変わらぬ傷なのに あぁずっと深く傷ついているの

深く深く刻まれて 膏藥も時間も効き目がないの  
私の心を傷つけたのは まず傷ついた私の視線  
こんなに自分に残酷なのに 其方は私に助けを乞うの？  
私の深い心の傷は 樹皮の傷など容赦しません

それでもずっと 麗しい木よ 伸ばせ堂々たる樹幹  
幾久しく生き 永久に証せ 私が選んだ恋の痛みを  
自ら邪魔して妨げられた欲望が与える痛みを

この育ち行く樹皮の内で 育てよ私が刻んだ韻文  
私の心が授ける言葉 その言葉は授ける私の心を  
授けられた授け手は 決して放さぬ授かり物を\*

その松の木の根元で他よりも土が被っていない処にパメラ姫は次の二行連句を刻んだ。

甘い根っ子よ 本当よ 我が欲望の  
根は貞節 変わらぬ愛の衣を纏うの

ムシドロスは、姫がこんなにも心地好い瞑想に合わせて恋心を刻むのを眺めながら、自分も同じく心地好い想いで付き添っていたが、その木々に自分の熱愛の証をも同様に身に付けさせた。刻まれた次の歌がそれを証言していた。

其方たち見事な松は 常に勇ましく天を目指して

ここで、美德を与えてくれる永遠の女神にかけて、あなた様がお守りになられますように。私をあなた様のものとなさってください（今そうであるように）、でも不誠実な征服によってではありません。永久に続くはずの私たちの喜びを、自分たちの良心を省みて汚れぬようにしてください。悔恨の影が互いの幸せへの甘き想いに忍び入らぬようにしてください。私はあなた様の妻になろうと決めたのですから、相応しく妻になるその時まで待ってください。妻以外の汚れた名で私の心に重荷を負わせないでください。これ以上何を申し上げましょうか。私が正しく選んでいたとしたら、総ての疑念は過去のものとなるのです。私があなた様に付いて来ましたが、貞淑であったか恥知らずであったかを決めるのは、あなた様のお振る舞いのみのはずなのですから。」

ムシドロスは（知将ユリシーズが機略をめぐらせて、トロイの町が安全であることの唯一の証であると伝説に謳われた、国の明暗を左右するパラディウムの像を盗んだ時の喜びよりも、ムシドロスの心には喜びが満ち溢れていたのだが）、パメラ姫の手を取って、幾度となく口付けをしながら言う、「私が何者であるかについては、神が簡単に姫君様の目を裁判官にしてくれるでしょう。姫君様への私の気持ちについては、その間の時が私の誠実さの保証となりましょう。姫君様が安らぐことが私自身がそうするよりも大切なのです。それゆえ、その者の思いを姫君様にとって一番いいと思われるように自在に曲げたり緩めたりすることが出来るほど、姫君様の虜となっている者を疑ってはなりません。低き身分の者がこれほど高貴な企てを実行出来るなんて、もしくは汚れた心の持ち主が姫の美德に目を向けることが敢えて出来るなどと思うことは間違いです。だからこれだけは私には決して出来ないということを告白せねばなりません。すなわち、それは姫がかしこい選択をなさったということを世の人々に知らしめること。そもそも世の中には姫にふさわしい人がいないのですから」。

心の秘められた動きを一つ一つ伝え合うあの愛情という理想的な調和の中で互いの心を確認めあいつつ、旅路の途中で以上のような会話に心弾ませていたドロスとパメラ姫であったが、慣れぬ旅ゆえ姫が疲れ果ててしまったころ、二人はその心地よさゆえそこで一休みしようと誘うような深く美しい森にたどり着き馬から降りた。その森はすべての樹がそそり立つ松であった。生い茂った枝の先端が重なりあって地面に完全な木陰を作っており、幹は森に歩いて入っていくに充分かつ快適な間隔を保っていた。また樹々の配置はどこを向いてもそれらが目にうつるが、それでいて視線が妨げられることのない完全さであり、その上、森の最深部には泉があり地表にこんこんと清らかな水が湧出していた。そこでドロスは、その日の食事のためにとあらかじめ持参した果実や他の珍味をもってきて、それらを美しい芝の絨毯の上に広げるのであった。一方パメラ

こうしてドロスは悩みの種である三人を片づけて自由になると、策略の恩恵を早速利用して、徳高きパメラ姫を姫のために用意した美しい駿馬に乗せ、時を移さず原野の中でも最も人の通らぬ処を自ら突き進んだ。そこには道しるべにと最寄りの港まで所々に目印を残しておいたのだ。パメラ姫には肩掛け布をあしらって相応しい変装を施しておいたが、途中で誰にも会わずに手配しておいた舟に辿り着き、夜までにはその舟に乗り込める、とドロスは確信していた。一方パメラ姫は、この間ずっと頭は自分の想像通りであって欲しいという欲求で一杯、心は恐怖で乱れていたのだから、申し分なく考え抜いて自分の企てを検討するだけの公正な判断力を失っていた。しかし実際には、姫は愛神の掟に従って自分自身という贈り物を授けてしまったドロスへと、心痛の種をも引き渡していたのだった。やがて、予想通りドロスが王子であってほしいという欲求からの烈しい責苦がはっきりとした希望のお陰で鎮まり、恐怖も悉く消えてしまうと、理性の輝きが再び姫の心を満たし、自らの姿を心の中で捕え始めた。そこで、どんな翼を拡げて祖国を飛び出すのか、また、どんな根拠に基づいてこんなにも不思議な決心を固めたのかを、姫はじっくり考え始めたのだ。さて、恋する姫はドロスが一緒にいてくれることに心を強くして、ずっと心の中でドロスのことを想い続け、一緒に馬に乗っている時は片手を忠実な恋の僕の肩へと載せていた。が、突然はにかんだ眼差しをさっと地面へと向けてしまった。といっても（心から信頼する弁護士に全財産を賭けた訴訟を委ねている依頼人のように）身体はドロスの方へ寄り添ったままであった。姫は穏やかな気持ちでドロスへと甘く香る言葉を懸けた。

「ムシドロス王子様（あなた様をそうお呼びするのは、そうであればいいという確信のものと希望があるからなのです。ムシドロス王子様以外の方であれば、私の心はご一緒することに同意しなかったでしょうから。もし私があなた様を正しく呼ばぬなら、その他諸々の言葉は総て我が惨めな行為と同じく無益なものとなり、あなた様が邪であるのと同じく私は不幸だということになります）、私のムシドロス王子様、ああ、あなた様の私への誠実な愛を示した熱意が、それに相応しく私の心が応えるように導いた今、総ての理性の掟に反して、私の地位も私の生命も私の誇りもあなた様に委ねているのです。あなた様の先だってからの情愛をより深きものとし、手に入れることと同様の保つことにおけるの美德、そして誠実さが恋の奴隷であるときと同様、自由なときにも変わらないということを見せること、それが今のあなた様のお役目なのです。さあ、ご自分が手際良く創り上げたものを今度は大切に育て、あなた様の私への愛を律してください。私が何時も愛を受けるに値する者であり続けるように。あなた様のなさったお約束は覚えていらっしやいますね。その約束を

人はアポロと同じような状態で同じようなマントで顔をおおわねばならないので、我が主人ダメタス様は真紅のマントを手に入れようと何処かへ立ち去り、明日にはマントを携えて戻るとおっしゃいました。どうやってお知りになったのか分かりませんが、我が女主人マイゾ様がうすうす感づいて、マントをダメタス様より先に手に入れんとマンティネアまでてくてく歩いて行かれました。マイゾ様は最初に願い事をしたかったからです。ご主人様は旅立たれる折に、私を強く信頼してこの秘密を教え、何者もその樹に登らぬように見張れと私に命じられました。しかし今、モプサ様」とドロス、「私は同じような自分のマントをここに持っており、ご主人様の命令は他のことでは破らぬものの、己を抑えるほど愚か者ではありません。私はただ非常に戸惑っております。といいますのも、私にはあなたを喜ばせてあなたの好意を喜ぶことしかこの世の中で欲しいものはないので、このような魔力によってあなたを手に入れるよりは、あなたの同意を得てあなたを得る方がもっと愉快的な戦利品だと思っているからなのです。さあ、結局はあなたを得ることになるのですから、選んでください、どのようにして手に入れて欲しいかを」。

しかし、子供が色鮮やかな人形を欲しがるとも、モプサのその木に登りたがる気持ちにはかなわなかった。そしてむずかることなく彼の言うとおりにすると約束し、おらの貴重な愛の全てにかけて、その願いの叶う木をおらが最初に手に入れることができますようにと彼にお願いし、おらを喜ばせるために、あなただけは高く登らねえでえーだ、と言って彼を安心させた。

時間が貴重なドロスは、モプサと礼儀を取り繕っている暇はなかったのだが、彼女に手を貸して木のとっぺんまで登らせた。そこからだと登った時と同様、助けがなければ降りてはこられないのである。彼は彼女の顔のまわりを、とてもしっかりと外套でくるんであげたので、彼女はひとりではそれをほどくことはできなかった。そして物音ひとつたてず、アポロ神に対し、まごころからお祈りを捧げるその流儀を彼女に教えた。やがて、どんなに長くても半日のうちに、彼女は三度自分の名が呼ばれるのを聞くだらう。しかし三度呼ばれるまでは決して返事をしてはならぬと教えられた。「そしてそのとき下りようなどと疑いをさしはさんではならない。そのときただ懸命にお祈りしなさい。そうすれば、どんな姿形でもアポロ神はあなた様のところへ現われます。神に臆せず願いを言いなさい。そうすれば、あなた様の願いはきっと叶えられるでしょう。私があなた様の甘美な愛を享受したいという願いが確実なようにネー。」こういう状況にドロスはモプサを残していった。モプサは心の中で、おらは世界の貴婦人になるだ、そしてこれからは決してミルク粥より粗末なものは口にしねーだ、と決心した。



公様の隠遁生活の原因なのか？ 私はどちらの側についたらいいのだろうか？  
 どちらにも幸福はある、だけど私には最高の幸運がどちらなのか判りえないから不幸なんだ」。

これらの謎めいた独り言のせいで、モプサは余計に事情を知りたいと思うようになった。そうして、そのかわいらしいブタは、彼の首の辺りにその美しく重たい腕を置いた。「ねえ、ドロス」とモプサ、「何を不思議がってるんか教えて。そうでなきゃ、何がオラの身に降りかかるのか知れたもんじゃない。ドロス、教えて」。

ドロスはモプサの好奇心を、靴屋が皮を型に伸ばすように最大限に引き伸ばすと、こう言った、「こよなく愛しいモプサ、事の重大さがあんまり大きなものだから、それを話すとなると僕の心臓ははちきれそう。けれど僕の心の中心を占めるのが君なのだから、君の希望によってそれがさらなる命を吹き込まれるのは当然だよ」。ここでドロスはモプサにこのような信じ難い話を聞かせた。何百万年も前にゼウスはアポロと仲をこじらせ、彼から神の特権を取り上げると天国から追い出してしまった。その為の気の毒なアポロは、労働とは無縁で物乞いをしたこともない身であったというのに、やむを得ず非常に惨めな生活を強いられ、そうこうするうちにアドメタスに仕える羊飼いとなったが（ある種の良質な家畜の群れをアルカディアから連れ帰ろうとしてやって来た折に）、他ならぬこの原野に足を踏み入れたのである。この小屋から少し離れた所にある美しいトネリコの枝の間で旅に疲れて身を休めていたところ、彼の哀れな嘆きを聞いた父ゼウスの赦しをついに得て、その木から再び黄金の天へと迎え入れられたという次第。ところで決して恩を忘れないという神の誠の性質を備えていた為、彼はアドメタスに二倍の人生を授けてやった。そしてその木が自分の栄えある祈禱の礼拝堂であったから、彼はそれに特定の性質を備え付けた。その特質というのは、誰であろうと当時のアポロと同じような状況に置かれ彼のような境遇にある者がその木の枝の間に腰掛ければ、その願いが何であろうとそれは叶えられるというものであった。これをバシリウス公は神託を通して聞き知ったが、まさにそのことが原因で彼は、羊飼いの姿に身をやつしてその身分だけに与えられた祈願の特権を得ることが出来るかどうか実際に試してみるに至ったのである。

しかしバシリウス公が幾度か試みてみたものの望みは叶わなかったが、それは公がそれにあてはまる人物ではなかったからであり、いまや公はダメタスに秘密を明かし、自分の指示に従ってダメタスが願い事をすることを誓わせた。「なぜなら」とドロスは言った、「アポロがその樹を選んだとき、非常な悲嘆に暮れてアドメタスが与えた真紅のマントで顔を覆っていました。願い事をする

それで今度は（ドロスが再度その如才無さを発揮するべき最後の相手）モプサ嬢について話さねばなりません。両親が出掛けたのちパメラ姫に仕えていたモプサは、姫が父ダメタスの家に取り残されているのは、バシリウス公が娘である姫君に猜疑心を抱いているためだと勘づいていた。このことはモプサの生れ持った卑しい根性（それは幸福だと思われる人々の上に降り懸かるあらゆる災いを目にすることに無上の喜びを見いだすのである）にふさわしく、パメラ姫への優越感を募らせ、姫君のなされることならどんな些細な事でも詮索の矢を立てずにはいられない己のまめまめしさに内心ほくそ笑むのであった。弱いおつむを平伏させるのは権力への執着にほかならず、（脆弱なグラスに注がれた強過ぎる洋酒のように）その欲望はパメラの美貌を妬む気質と深く結び付き、言うに事欠いて「もしこのモプサもパメラ姫のように公女として生を受けていたんなら、おらの究極の美貌もパメラ姫同様に高く評価されるはずなのに」と自分に言い聞かせる始末。この女の性を逆手にとって、自らを取り巻く窮境の中でドロスは最後の一仕事に取り掛からねばならなかった。本当は自らの企みを大して妨げられることのないようモプサをふん縛ってさっさと片を付けようとしたのだが、徳高きパメラ姫は（そうしようとするドロスに目を向けて）その表情で彼を制止したのである。それはこのような姫君自身を貶める証拠を残していけば、自分がドロスと共に逃げ出したという丁度よい口実になってしまうから、いかなる自分たちの非の跡も残したくないと固く決心していたからであった。そこでやむなくドロスは最初に考えていたやり方でモプサを騙すことにした。その計画に従い腰を下ろして自分が一步譲って認めたドロスによる奇妙な騙しの手口を黙ってみているパメラ姫、そのすぐそばで（その眼差しはぼんやりとしか映らぬ鏡に投影された自分の姿に肩入れして）うっとりとしているモプサ、その両人の間に割って入り、ダメタス家の屋根にその顔を向けて体全体をすくめ、そして時々地面を踏みならして、ようやくドロスはモプサに（いつもブンブンと蜂のように忙しく何でも知りたがっていたので）、おらの愛しいドロスどん、なんが苦しゅうてそげなおかしなことをするんだ、と尋ねさせることができた。

ドロスは（まるで精神が超自然的なことを瞑想することにより麻痺していたかのように）じっと静かに立ったままで、時々額をなでたり、また時々身体をピクッとさせた。そういうわけで、ドロスはモプサを、聞きたくてウズウズするその秘密を聞かずにいるよりは、自分の処女をドロスにあげた方がましというような願望にまで落とし入れたのだった。ドロスはまだその意図には応えずして、尚も茫然自失の状態だった。「あゝ、ヘラクレス」と彼、「この疑いから解き放してくれ！ 人の願いを何でも聞き入れてくれる木だって！ これが

がどのようにしてマンティネアのオデミアン通りのカリタのおじの家でその夜十時頃落ち合うことになったのか、事の次第をばらした。その約束の後、ダメタスはドロスに感づき、自分の所に彼を呼んで、非常にいばりちらして自分の幸運の全てを語り、とにかくドロスをあの鬼婆マイゾの許に戻し（「奥様、“あの鬼婆”と、確かにダメタスは奥様のことを言いましたが、陽気さからそう言ったのであって、悪意からではありません」）、さらに自分の留守に関して何かもってもらいたい口実を作ってほしいと頼んだのだった。「というのも」ダメタスはカリタにキスをしながら言った、「わしがあの鬼婆とどのような生活を送っているか知れば、お前はわしを憐んで、唯一の慰めの中へ私を迎え入れてくれることになるだろうから」。

「では奥様」とドロスは続けた、「私めはそれを当てにしておりますが、奥様のご思慮ご分別をお働かせになって、是非マンティネアに赴きいただければと存じます。（密会の約束の時間までどこか女友達の家にもお隠れになってください）さすれば奥様がきっとお二人がご一緒のところをお見つけになり、慈しみの心を持って道を踏み外したご主人様を改心させることができるに相違ありません」。

ドロスがカリタの美しさを褒めたたえた言葉ほど、マイゾを逆上させたものが未だかつてあったであろうか。その言葉は妬みという毒気でマイゾの嫉妬心をさらに膨らませ、その憎悪は自分の夫がカリタに贈物を渡したことを耳にしていますます肥え太り（それらの贈物はマイゾ自らの臍物からもぎ取られたようであった）、彼女のその窪んだ目があまりにあさましい表情を呈していたため、その時冥府の神プルートが彼女の魂を二束三文の安値で買い叩いたのかと思われるほど。しかし悪意の炎がマイゾの内なる部分をなめつくした今、アレクトの絵画を見たことがある者、あるいはメディアが我が子を殺した時の表情を知る者なら誰でも、記憶しているその様子を十分に再現するために、ほかならぬマイゾを持ち出せば事足りたであろう。これまで杖の支えなしにはほとんど歩くこともままならなかった彼女も、憤怒という翼を得て家の周りを飛び回っていた。今までマイゾの耳は死を招くような復讐の囁きとは無縁であったが、復讐心そのものが今や彼女の穏やかな精神に宿ったのであった。とうとう言葉少なに（恨みに満ちた気持ちが沸き上がって言葉に詰まったのだ）彼女は既に走っていき、7年間も鞍をつけられることを忘れていた牝馬に自分の手で鞍を付けるのであった。かようにして、どうやって呪わしい夫に罰を与えるだけでなく恥辱をも与えてやろうかということばかり思案しながら、マイゾはマンティネアに向かった——しかしその暗い情念の持ち主についてくどくど話し続けても仕方がないので、このくらいにしておきましょう。

ああ言葉 夏の甘露みたいに俺様に降る  
ああ息吹 伸び盛りの豌豆よりも甘い香の  
ああ舌よ そこには蜜入りの美酒がある  
ああ声よ 鶴の高い鳴き声も色褪せるほどの  
お前ら四つはいつも言う これがああ娘の契りだって  
ああ別嬪は俺様のも おれはああ娘に首ったけって

陽気な髪 刈り入れ時に舞う葉よりも軽やかさ  
唇は濃い赤紫 真っ赤に熟れたさくらんぼのよう  
眼はくっきりぱっちりて 立派な雄牛の目ん玉みたいさ  
ああ乳房 二頭の白い羊が若い盛りに膨らんだよう  
お前ら四つはおれにくつつく この契りの証だって  
ああ別嬪は俺様のも おれはああ娘に首ったけって

お前 白い柔肌よ 巧く固めたお乳みたいに真っ白で  
いろんな処をつるつるにする 砥石みたいにすべすべだ  
お前 めんこい體よ 新たに刈った羊毛みたいにふるふるで  
でも技でしっかり漬け込んだ塩漬け豚みたいに締まったお肉だ  
最初の四つは言うだけで 次の四つは契るだけだよ  
だったら最後の二つは絶対 契った至福の質草払えよ

詠い終わると、羊飼いは膝のあたりで彼女を抱きしめて言いました、『いしいカリタよ、この辛い思いがやわらげられるのをいつ味わえるの、そしてお前の喜びを与えるという約束は（もうそのときが来ているのに）、いつ行動でそれが真実であると示されるの』と。その言葉を聞いて、私は、二人のほうへ近づいて行き、そして（というのも、今ではその羊飼いは顔を上げて自分の姿を彼女の汚れのない瞳の中に写していたからですが）何とそれは我が主人ダメタスだということが分かったのです——しかしここでマイゾは、聞きしに勝る汚い言葉でダメタスをののしり、ドロスの話をさえぎってしまったが、そのののしりの言葉を想像できるほど私はがみがみ屋では御座いませぬ。

ところで、ドロスは（あたかもマイゾの性急さにひどく気分を害したかのよう）マイゾがもう少し静かに聞きますと明言するまで、それ以上は何も言おうとしなかった。「というのも」とドロス、「戦い開始の合図がこれほど奥様ををいらいらさせるのなら、いざ実戦となったとき、奥様はどうなさるのか」。それから二人の間でおなじみの多くの気晴しをした後、ドロスはマイゾに、ダメタス（彼はカリタに公爵から得ている偉大な信頼を述べたて、そのうえ、彼女にかなりの量の贈り物をしており、さらにもっと贈ると約束までしている）

情に扱い、ご自分の受けた苦難で他人に復讐することに満足なさるよりも、欠点も自らの麗しき美点への利益としてご判断なさるということを。実はこういうことなのです、奥様」と、続けて言うには「昨日、私は美しきモンティネアの都を見はるかす蔽かなる丘の上へと羊たちを追っていました。その丘の斜面、太陽の猛威への壘となる地面の窪みのところで、私はたまたまうら若き乙女をみとめたのですが、その娘はまこと申し分ない美しさでした。そしてその美しさをさらに高めていたのが、美しさを補うのに何の飾り気もないということでした。衣服は、羊飼の娘が身につけるようなものでしかありませんでしたから。それに髪の毛はちょうど良い長さの自然な洗い髪でしたが、時折澄みきった星々のような目の前にたれて、娘は髪を耳にかけねばなりませんでした。そのようにして、髪の毛でしばし所々隠されていた娘の完璧な品々の宝箱が再び開くのでした。娘の膝には羊飼が寝そべり、太ももの間にすっぽり包まれているので、私は羊飼の顔を全く見分けられませんでした。しかし、私の目がその光景に釘付けになっていたとき、娘の天使のごとき声がこの歌にのって耳に響いてきたのです。

一途な彼があたいの心を あたいが彼のを持っている  
いかさま無しの取り引きで 互いの心を取り替えっこ  
あたいが彼の心を大事に仕舞い あたいのは彼が抱いている  
かつて一度も無かったよ こんなにもいい取り替えっこ

彼の心はあたいの中で あたいと彼とを一つに結ぶの  
あたいの心は彼の中で 思想と五官の手引きをするよ  
あの人をあたいの心が大好きさ だって以前は彼のもの  
あたいだって彼のことが大事 だってあたいの心にあるんだよ

彼の心が傷ついたのは きれいなあたいを見ちゃったから  
あたいの心も傷ついた 彼の心を傷つけたって  
あたいのせいで 彼は傷を負っちゃったから  
いつも思うの あたいの心でその傷が疼くんだって  
二人が受けた同じ傷も この交換で幸せ見つける  
一途な彼があたいの心を あたいが彼のを持っている

しかし、彼女の前にいる羊飼いは、あたかも彼女の息でしか音のでない風笛であるかのようにでした。彼女が甘い唇を閉じて詠い終わるや否や、その羊飼いは彼女の詩に答えて次のようなひなびた牧歌を詠いました。

世の中にくたくたに飽きてしまっているという心境が伺われた。マイゾは今よりもましな生活には全く望みを抱いておらず、ただ一人たりとも、心であれ体であれ、彼女がそこから穏やかな精神を育むことが出来るような良き者を見つけることが出来ずに、長い間自分以外のあらゆるものを忌み嫌ってきたために、今や自分自身をも嫌うようになっていた。このいと喜ばしき気質の御夫人の前に、ドロスは進み出ると、彼女の方に笑顔を作ったが、それはちょうど陽気さにくすぐられ、なおかつ哀れな風を装った、入り交じった感じの表情であった。マイゾは（他人が快活にしている様子は決まって自分自身の妬みの下味となったから）、彼の態度にすぐに気を止めると、使い古して擦り切れた悪意を顕わにしてこう言った。

「さあ悪魔よ」とマイゾ、「ニヤニヤ笑うことを決して止められないこれらの悪党どもを連れて行け。というのもさ、どうせあたしゃ、モプサみたいにきれいじゃないからさ！不躰で頭の軽い奴があたしを見る目を見てみ！」

ドロスは待ち望んでいた機会が訪れたので、「本当のところ奥様」と返答した。「私の笑顔は奥様に向けているのではなく、奥様から離れた人々に向けているのです。確かに私は他人の恋の楽しみ事に表情を合わせる必要があります。そして、ドロスはマイゾを抱いて、たてに揺すりながら付け加えた。「誓って、奥様」と彼、「今は永遠のおやすみを言う時間なのです。あなたがいるべき時間に、もしかすると他人があなたの場所を所有するかもしれませんので」。

マイゾは、常に悪意に欠けることがなかったので、十二分に疑ってかかったが、尚一層の用心深さを満たすために、一時的に温和さを繕い、ドロスに何を言いたいのか教えてくれと優しく望み、こう言った、「だってさ、あたしゃなんて、田舎者の夫に意地悪く扱われてもおかしくないのだから」。

ドロスは、まるでそんなつもりはなかったかのようにいったんその話題から離れたが、マイゾの強い好奇心を激しくかき立てるまで待って、これから言おうとすることをマイゾがますます信じるようにしておいた。そして、今の状況を思いやる道義心に深く揺すぶられたかのようなかしこまった顔つきで言うには、「奥様。私は自らの判断において大いに戸惑っています。といたしますのも私の思考は誠実に判断するよう私に迫るのですが、判断は私を誠実から遠ざけるから。その決断とは、信頼して委ねられた秘密はかたく守られるべきだという世の理と、不誠実な秘密は暴かれるべきだという特別な例外の間での決断なのですが——とりわけ、ばらしてしまうことでその秘密が先手を打って妨げられたり、もしくは少なくとも正されるような場合には。しかし、判断の両天秤にかけるとき、奥様のご判断の方が重いのです。奥様はご自分がご存じのことに中庸のご判断をなさると私は信じていますから。そして、ご存じのことを非

一考だにしなかった。意気揚々と出立したダメタスだが、どんな豪邸を建てようか、どんな贅沢なご馳走にありつけるだろうか、そしてそれらの絵空事の中でも、自分の得た財を蓄える金庫を作らせるのにどれだけお金を費やさねばならないか、という想像にのみ胸ふくらませて道を急いだ。彼には10マイルの道程が2倍にも感じられた。だが事の道理に反して、その道程を長く感じたにもかかわらず、退屈とは思わなかった。ダメタスは幾度もこんな危急の要件に際してちっとも急ごうとしないロバの思慮の無さを呪い、運び切れぬ新たに見つかった財宝を持ち帰るために、自分がロバの背になればいいのにと考えた——ああ哀れなる願い人よ、ロバの頭ならばなれるかもしれないが。そしてついに彼の思い焦がれた黄金のドングリを結ぶはずの樹の下にたどり着き、すべての道具をロバの背よりおろし、直ちに傷一つ無い大地を切り刻み始めた。やがてダメタスは数枚の約束されたメダルという鳥籠に捕まえられた。それは彼には期待を更に膨らませる格好の手付金だったので、(樹木や大きな岩が邪魔になって仕方がなかったが)十二分な時間をかけて穴を掘り進もうと考えた。そして額に汗して掘り続け、とうとう岩盤に到達した。その岩盤は確かに墓所の蓋には全く似つかわしくなかったが、そこにはアリストメネスの名が刻まれたイトスギの箱があり、その中にはこのような詩行が書かれていた。

ある男 追放受け 長きにわたる悲願かなわず  
 彼を阻むは 私財奪った者による 密かな妨害  
 その人ここに希望を隠し それによりて かく念ず  
 我が傷口 分別の知恵により 癒されるが良い

さあ捜せ 人が何に最も重き価値置くか 見るが良い  
 全てはここに集約されん これぞ我らが勞賃に違わず  
 これぞ我らの生きる糧 これより我ら安息を培い  
 これをしかと掴む者に 更なる富は無用なはず

さあ深く覗き込め されば目前に広がる光景  
 それは 貪欲な心の客人には またとない歓待

ダメタスは箱を開けてそれらを読むうちに心躍らんばかりとなり、新たに沸き上がった欲望に膨らみ、石を持ち上げようと取り掛かった。

さてさてこの間にお話し致しましょう。ダメタスが財宝の方に向かって半マイルも進まないうちに、ドロスはマイゾの許へと出向いたのです。彼女は煙突の端に座って何やらブツブツ愚痴を吐いており、その身振り一つ一つからは、

(未だかつてなかったことに) ドロスに向かって帽子を取り、モプサを、金糸の衣にくる包まれて育った箱入り娘ではあるが、ドロスにやろうと約束しながら、これ以上焦らされればわしの心臓はもたぬ、頼むから焦らすのはやめてくれ、とドロスに懇願するのだった。

「旦那様」と応えてドロス、「旦那様は私にとって最上の至福を約束して下さいましたので、私も家来としての義務に縛られないならば、その約束をして頂いただけで十分に報われます。ですから私もこの身に起きました幸運を旦那様に引き渡し、労力を振り絞って得た成果を旦那様に捧げることに致します」。そうして彼はダメタスに語って聞かせたのだった。いかにして檜の老木の下で(その場所がわかりやすいように、ドロスには十分に沢山の目印をダメタスに説明してやった)地面をほんの少しばかり掘ってみたところ、非常に多くの高価な金の延板のべいたが散らばっているのを見つけたかを、さらに深く掘り進めると大きな石にぶち当たったが、その時の鈍い響きからすると、どうやらさらに巨大な地下室の蓋のようであり、その石の上には勇将アリストメネスの名が表に刻まれた糸杉の木箱があったこと、その箱の中に詩が入っているのを見つけたが、その文面を見ると、そこからさらにもう少し深い所に、ある武人の財宝が全て隠されていること、いつの時代に彼がアルケイディアに起こった動乱のために追放の身で生活したかのいきさつをそこから読み取れること、そういったことを教えたのである。

話し終わると、ドロスは長い間携えていた金の延板を数枚ダメタスに渡し、そしてこの件は秘密にしておくべきことであつたし、また半日もあれば男一人で出来る仕事であつたので、私が穴の底を探りに行きましょうか——そうすることをダメタスの考えを確認するまでは実行に移すのを控えていたのだ——申し出た、しかも探し当てたもの全てを正直にダメタスの元に持ち帰るという約束で。あるいは、ダメタス自ら赴いてその心躍らす光景の最初の目撃者になることをお望みですか、と尋ねた。

ダメタスがいずれを選ぶのか、疑うべくもなかった。なぜならその空想力はこの莫大な財宝をすでに食らいつくし、自らの取り分がはっきりしていないのに、今や相手を牽制しはじめる始末であつたのだから。そしてすぐに瘦せているが頑強なロバを連れてきて、スコップやツルハシを積み込み(それらの代わりに別の物を積んで帰るつもりで)、全速力で財宝のありかへと向かった。誰にも別れを告げることはなく、ただドロスにパメラ姫の面倒をよくみるように言い残した。ドロスは山積みの仕事をすると約束はしたものの、無論そんなことをするつもりは毛頭なかった。愚か者がそうであるように、ダメタスは、宝物全体に目をくれない者がその一部に心動かされるはずなどないということ



道が望ましいからだ。万事上首尾に運ぶと、ドロスは一隻の船を己が命を賭けた旅のために借り受け、それから馬を数頭手配して落ち合う場所へと姫を運ぶ手筈を整えた。家路に着くと、今やドロスの憂慮の種となる最後の一事に思いは至った。即ち、例の三人組という分不相応なお供の忌まわしい監視の眼をどうやったら掻いくぐられるか。どうすれば三人の注意を他に引き付けられるか、あの三人を煙に巻かなければならない、と知恵を絞るうちに思いついたのが、誰の性分にもまた宿命にも個々の特徴というものがあるということ。これを利用すれば、三人を引き付けておけるはずだ。

ダメタスのどろんと濁った頭に関しては、その貪欲な所を利用して引っ掻き回してやるのが手っ取り早いと思われた。マイゾの呪われた邪悪な心は、猜疑心でくすぐるのが一番。というのは、彼女の腐った脳味噌は、誰のことをも良かれと思わぬから。ところで青臭い小娘モプサに至っては、目を剥くほどの驚きをもたらさないものには目を開けることさえ出来ない人だから、珍奇な物こそ最上の餌。では、まずダメタスから作戦開始といこう。ドロスは小屋から10マイルばかり離れた所で（そちらの方角は彼がパメラ姫と一緒に進むつもりの方角とは全く逆だった）日がな一日そこに生えている樫の老木のもとで、地面を掘り穴を開けていた。そういう具合に、何かしら心躍らすものの兆しをちらつかせることで、ダメタスの欲深い期待をできるだけ長引かせようという訳。そうした後、ドロスは喜びと焦り<sup>あせ</sup>の入り交じった表情で羊飼頭の許に戻ると、彼に明かすべき重大な内々の秘密があるのだという風にその右手を擱んだ。

「旦那様」ドロスは言った、「このように自由気儘に育てられた私の魂ですから、よもや神々はそれが旦那様にお仕えしたいという想いを今のように心に強く抱くように、と初めからお定めになっていた訳ではありません。さりとて実際に私がお仕えすることで神々はお考えになっていたに違いありません、神々からかくも愛されておいでの方、旦那様がそういう御方であるということはその真正直な所がよく物語っておりますが、その方に何か莫大なお恵みをもたらすようにと。そう思いますがゆえ、私が確信するところの物が旦那様に授けられた物であるという事、すなわち旦那様の境遇がご立派なお人柄に釣り合うものとなるという事を、誓って申し上げねばなりません」。

ドロスはそれ以上言わなかったが、それはダメタスをしばらく餌を啜えたままに泳がせておこうと思ったからであり、その当人はドロスの言葉が何を意図したのかは解からずとも、それが悪い知らせを運んできたのではない事をしかと見て取るや、自分の期待する幸運がどの程度かを想像するのに無限の能力を備えていたので、それだけ一層事の真相を知りたがった。そういう訳で、彼は

その解決策とは、直ちに彼女を今の困難さから救ってくれるものであり、また彼女がただ一つ追い求めるものを獲得することにおいて彼女の目的にかなうものであった。結局、彼女は次のように決心した。ギネキア妃が自分を、自分がフィロクレア姫を得たいという、各々の欲望の激しい力に屈服する以外に道はない。なぜなら、その欲望に抗えば抗うほど、それだけ一層その欲望をかきたてることになり、また、欲望の自然な流れに従えば、その流れが行き着くところ自ずから、クレオフィラに、自分の燃え盛る欲望の向こう側に連れていってくれるであろうから。

ところで、羊飼のドロスが私を呼ぶ声が聞こえるような気がします。希望に溢れる自らの冒険談を貴婦人の皆様方へ少し語ってもらいたいのでしょう。真の友というものは（絶対に援助か慰安かを受けられるほど誠実に互いの運命に関わりあっている場合）、言葉では語り尽くせないほどの慰めである、と経験から悟ったことがある人ならば、引き裂かれたドロス——恋と友情とに引き裂かれているドロスの現状を容易に察することができる筈。しかし愛神は、恋情に燃える頭脳に必ず備わるといふ議論を展開する威力の他に、飽く事を知らぬ情欲による絶え間ない突き刺しを伴っており、（貴婦人の皆様がお聞き及びの通り）すでに本丸を攻め落としていた。とはいえ、そのせいで王子の忠実な友情の絆が損なわれるということはない。この友情は精神が自由に満足するのを決して妨げたりはしないからだ。それでも常にドロスは（自己に対しては厳格な裁判官であるため）何らかの点で誤りを犯しているのではないかと悩み、どうすれば速やかに然るべき償いをして過ちを改められるのだろうかと心を傾けて思案した。しかし、やはりドロスが第一に検討したのはどうやって駆け落ちを遂行するかだ。駆け落ちについては、すでにパメラ姫の同意を得ていた。モプサの名をだしに姫御自身の面前で確認し決定済みなのだ。ドロスはモプサに事寄せて口説くというこの方法を使って、パメラ姫の意向を何かと伺っていたが、駆け落ちの件も、モプサ嬢にとってそのように振る舞うのが最善であろうかという形でパメラ姫に尋ねていた。そしてモプサの妬みは妬みを掻き立てるものの方に使われていた。この事については貴婦人の皆様方はドロスがクレオフィラへと語った物語をお聞きになってすでにご存じのはず。さてドロスは心を砕いた最初で最大の難関を越えていたので、今度は、どうすれば自分の欲望が収穫まで漕ぎ着けるかに腐心した。これに関してもドロスには素晴らしい展望があった。その実現へ向けて（すでに数日間の暇を羊飼頭のダメタスからもらっていたし、ダメタスはドロスをもう娘婿と考えるようになっていたのだ）ドロスは原野をあちこち徘徊し、あまり知られていない道を探した。最寄りの港へ通じていて、多くの通行人が行き交う往来からはできるだけ離れている間

なことを伴うとき、双方にとって救済と悲哀なき慰安が唯一の答えとなるのです。奥方様は得ることなく、私は与えられないのですから」。

「ああ」とギネキア妃、「このように妾を蔑むようなお答えをなさるなんて、よっぽどお暇だったのでしょね。ギネキアはかように軽蔑されるのですか。妾はあなたの目から見てそれほど卑しい虫けらなのですか。いいえ、いいえ、今に見ておれ、冷酷な虎め、私一人がこの悲劇の演じ手では終わらない。妾が破滅するのなら、誰か他の者に我が破滅を強いてやる。私が燃えさからねばならぬなら、悪意に満ちた隣人に我が炎を味わわせてやる。私の不眠不休の視線が、あなたの偽りの正体を隠す仮面を見抜いていたことが分からぬか。あなたに言っていなかったかしら、ああ愚かな人（もし妾がそれほどの大間拔けでないなら）、あなたがその見かけの虚飾で妾たちをだますつもりだったのを妾は知っていたと。女の心に生まれた愛の激しさをあなたはずっと見はるつもり？ あなたが抜け目なく選んだ我が娘は、きっとあなたを守ってくれるでしょうねえ。あなたが夫バシリウス公の心を偽りでたぶらかし、騙して王室に恥をかかせようとしたと公がお知りになった折には。覚えておいで、非情な人、妾は目を見はるような復讐のお手本で己の不幸を締めくくるつもりだと。そして生まれたときから我が呪われた揺り籠で育ったあの娘フィロクレアには妾の痛手の苦痛を、あなたには暴虐の苦しみを味わわせてあげる。そして最後に妾は、己がしでかしたことの苦しみを自ら味わうことになるのです！」

クレオフィラ（それまでずっと彼女は、自分の正体がギネキア妃にばれているかどうか半信半疑だったのだが、今やそれをはっきり掴むと）は、諺に言う如く、狼の両耳を掴んでしまった絶対絶命の窮地に立つ者のようであった。何となれば、掴んでいれば噛まれるし、放してしまえば殺される。今までと同じく、クレオフィラがギネキア妃を避ければ、激情にかられた公妃がその愛に憎しみの力を働かせるであろうことは明白である。しかし彼女の心はフィロクレア姫にしっかり結び付けられていたので、公妃の願いを聞き入れるのは、千もの死より悪いことであっただろう。それにもかかわらず、クレオフィラは覚悟が必要だと悟った。というのも、ギネキア妃の恨みは一刻の猶予もならず、また自分の正体を掴まれたからには、フィロクレア姫に危険が及ぶことにも加えて、自分の望みが永久に完全に潰えてしまうからだ。そのうえ、バシリウス公の言葉も思い出した。何と折り悪しく、公はこの生活を切り上げて宮廷に戻るつもりになっていたことか（それはクレオフィラの望みにとって大きな障害である）。最後にクレオフィラは、ドロスの企てが、この二人の申し分ない友情にいくらか奇妙な変化をもたらすかもしれないと考えた。それで、これら当面の困難さに取り囲まれて、彼女は一心に心を傾け、ある解決策を考えついた。

されていないなんて。地獄におわす復讐の三女神よ、死んでしまった美德を目覚めさせるにも、怒れる神々にすがって慰めを得るのにも時は既に遅すぎるから、復讐の女神たちよ、さあ、そなたに身を捧げる者に手を貸しておくれ！この怒りが満たされますように、それがもたらす成果はそなたの職務にぴったり。妾が有頂天になり過ぎるかも、と心配するには及ばぬ。罪に苛まれたこの良心の痛みを和らげようとするのは何であれ不可能だから。妾はただ地獄の炎のごとく燃え盛るこの熱病ゆえの苦しみを和らげたいだけなのよ。ああ、惨めなギネキア！」

クレオフィラはギネキアの名前を聞くや否や、全身に冷たい汗を感じ、まるで毒歯を持った毒蛇をいまにも踏みつけるかのように、身体を退けようと思ったであろう。しかし、動揺のあまりに来る時の動きよりも落ち着かない動きをしてしまった。そのためクレオフィラは姿を見られてしまい、ギネキア妃は突然立ち上がった。たしかに、場所を変えて、恋の苦悶を和らげるために、この洞窟（ダメタスが最近の暴動でパメラ姫を安全にかくまっておいた、まさにその洞窟であったが）に入り込んでいたのはギネキア妃だった。妃の心は常にクレオフィラを追いかけていたので、何でも見抜く恋する者の目はすぐにそれがその当人だとわかった。そして飛んで逃げたいという顔つきを彼女に見て取ると、足元に崩れ落ち、彼女にしっかりとすがった。

「ああ」妃は言う、「どこへ、それとも誰から、あなたは逃げ出したいの？どんなに獰猛な獣でさえも優しくすれば飼いならせる。どんなに硬い火打石でも柔らげられないことはない。どうしてあなたの目にギネキアはそんなに価値のないものになるの。それとも、豊富な愛が誰を価値あるものにするのが出来ないのというの。残酷や不恩が善良な心から生まれることが出来るなんて考えないで！この力強い激情の新しい効果をよく斟酌なさって。王妃の妾が自分の立場に不適當な、女性として似合わないにもかかわらず、あなたの足元で哀願者にならなければいけないなんて！あなたを生んだすばらしい女性にかけて、あなたの心の全ての喜びと欲望の達成にかけて、妾はあなたに妾のことを少しは思いをかけてくださるように嘆願するのです。妾に一刻一刻迫り来る妾の死を悔やんで手遅れになるよりは、今、妾を助けて下さって哀れみを示して下さい」。

クレオフィラはすっかりうんざりしたような表情で、こうして公妃に出会ってしまったことを己のとどまることのない不運のせいにした。「奥方様、疑いなく」とクレオフィラ、「その欲求が叶うような欲求で、その当事者があなた様のような立派な御方である場合、それを否認するにはそれ相応の根拠となる口実がいるに違いありません。でも当初の恋の動機が発端からして絶対不可能

どんな洞窟も 溶け行く蠟も 悲嘆の言葉も所詮  
持ち得ぬ 示せぬ 語り尽くせぬ 安らぎのない妻の苦悶

クレオフィラは詩句を読もうと立ち止まりはしたが、それも長い間ではなかった。というのもその石からほんの少し先に、暗い片隅で地面に顔を伏した麗人の姿がふと目に付いたからであった。その人物はあまりに深々と顔を下げているためにこちらからは何者なのか見当が付かず、また向こうの方はクレオフィラさがの存在には気付かぬ様子。しかし（知りたいという欲に駆られるのが人の性、その上悲しみはとりわけ仲間を得ようとしたがるものだから）クレオフィラは麗人の近くまで出来る限りそっと足を運んでみた。すると激しいすすり泣きと共に次のような言葉が洩れて来るのが聞こえた。

「暗闇よ、お前は浅はかだわ、妻の身の内に潜む闇の有り様を当人の目の前に写し出すなんて。けれど妻はお前をこの悲しみの密かな立会人となるように選んだのだから、その悲しみに安全な避難所を与えておくれ、それを疎ましいとは判断しないでおくれ！ それから、出来ることなら悲しみを吐き出すことで重荷に押しつぶされそうなこの胸が少しは軽くなるようにしておくれ。おおなんてこと、悲しみよ、お前は征服に屈した妻の魂を完全に手中に収めたのだから、少し休むがいいわ、奪った戦利品にさらに追い討ちをかけるように新たな火をつけるのはよしておくれ。呪わしい理性よ、そなたは身に降り掛かってくる邪悪を見抜くのにそんなにたくさん目をお持ちなのに、それを防ごうという時になんとひどく目が霞んで、いいえそれどころか見えなくなってしまっていることかしら！ 妻は見捨てられた生き物、だからいっそのこと完全に悪に染まってしまうたい。だって悪というものは蔓延はびこるものですもの。でも、踏みに踏まれてぼろぼろの美德がその痕跡を残して私に苦い非難を浴びせようと未だに頑張っている。妻は自分の中で分裂してしまって、それなのにどうして踏ん張れるというの。自分の中でひっくり返されてしまって、誰が助け起こしてくれると言うの。悪徳はまさに新たな苦悩の育て親、そして妻が縁を切ってしまった美德は、その二つの忌まわしき対比をさらに著しいものにさせている。いいえ、いいえ、美德よ、妻の魂はこんなにもなおざりにされているのだから、妻はお前の影しか持っていなかったのだわ、でなければお前自身が単に影に過ぎないものだったのよ。妻の活力はなんとまあ、すっかり無駄にされている。願望は痛みをこうむるだけ、望むこと自体出来ないのだから。たとえ望むことが出来るとしても、せいぜい悪戯を企てるくらい。人の心はなんと奇妙に入り組んでいること、己の身のうちにある悪を憂えて惨めになる程度にしか善が残

し天がいつ何時<sup>なんどき</sup>でも怒りに満ちた災いがある程度蓄えているとすれば、間違いなくその大部分が我が喜びなき宿命に流れ込んできたに違いない。それが非常に膨大なものだから、残された世の人々の持ち分はあまりにも少なくなってしまい、かくも悲痛な嘆きの声をもっともな理由をもって上げることはもはや誰にもできぬはず。さてはて」と言葉を続けて、「そなたが何者であれ、正体を暴いてやるぞ。なぜなら、そなたの歌は我ら二人が少なくとも無慈悲な親方のもとで働く職人見習いの仲間であるということをよく物語っているからな」。そうしてクレオフィラは立ち上がり、なおも悲しみに呻<sup>うめ</sup>く声を頼りに歩を進めた。そうするうちに、とある石の上に小さな蠟燭の光が灯っているのが見え、その光の下にはつい今しがた書かれた（と思しき）このような詩行が記された一片の紙切れが置かれていた。

如何にして妻の太陽 その光 光輝に満ちて  
しかも妻に暗く醜き夜をもたらす因となりて  
また如何にして 妻はこの暗き苦境に囚われて  
それを嘆きつつ 嘆きの因を楽しみて

切り裂かれし妻の心 至大の恐怖をさえ慄かせて  
恋に憑かれた感覚と 権利を言い張る理性にて  
妻の心で 両者の間に戦が起こって  
どちらが勝っても 敗走するのは妻自身なんて

来たれ 天を覆う恐怖よ 妻の眩みし眼を覆って  
悲哀よ 妻の力を心髄まで吸い尽くして  
正当なる嘆息よ 喜びの光輝すべてを吹き消して  
絶望よ 妻の倦み果てし魂を餌食にして  
もう終り 終り 書くこと叶わじ 鈍い筆にて  
乱れた頭で考えられず 話も出来ぬ 鈍れた舌にて

このソネットのすぐ下には次の詩句が書かれていた。

この洞窟は闇 かつて光が射したことすらなくて  
この蠟燭は自ら溶けて 痛みもないままに死す  
これらの言葉に苦痛が満ちても 言葉は何も感じぬもの

妻の眼は曇りぬ かつてはこよなく澄みしとて  
妻は心を磨り減らし 常に新たな苦悩を試す  
妻が苦悩を嘆いても 苦痛はすべて妻自身のもの

それは洞窟の奥深くから流れて来るようだが、その場所が空洞になっている事も手伝って（あたかも竹筒の中のように）その声は自在に彼女の耳に届いて来た。次第にその声は音楽的な節回しを帯び、低音の豎琴に合わせてこのような歌を歌った。

いざ聞け 悲嘆に暮れた亡霊たちよ 黄泉の復讐の女神たちよ  
憎悪に満ちた天がもたらした 我が悲哀  
天が謀りしは 我が輝かんばかりの命の炎よ  
それを惨めな灰燼に起さんとす 鏡が映すは我が崩壊

ああ かように力強き天使を用い  
その憤りの矢を かように卑小なる的にむけ放つを見よ  
いざ洞窟よ 我が墓穴となるがいい  
来れ死神よ 汝の漆黒の懷中に我を受け入れよ

いったい日々死にゆく精神にとって 生命とは何であろうか  
そこで人生に一息ついても 吸いこむのは悲哀の空気とは  
そこではあまりに愛する人を目にし 身体が麻痺するのみか  
最も高尚な思いが 真逆さまに落とされてしまうとは  
その時知る 自らの外面が 自らの状況がどうであるのか  
肉に包まれた死神 生きながら墓に埋葬されるがごときか

そして暫く間を置いてから、悲しげな旋律とともに次の八行連句が続けて歌われた。

病める民の如くに 奇矯な気儘が流れ込んで  
甘き快は味わえず 酸敗のみが喜びよ  
妾の心に 恋の熱情 日々育つ間は  
情火の鎖が 心の自由を縛りつけるよ  
喜びはまるで異邦人 その姿に耐え切れぬ妾は  
また 忍びえぬ 慣れ親しんだ苦惱以外は  
苦渋の嘆きは最高の美味 苦痛は慰安よ  
死に至る病でも 常に恋しい我が恋患いよ

「おお、ヴィーナスよ」とクレオフィラ、「私のことをこれ程よく熟知するこの人は何者か？ 我が苦悩をこれ程生き写ししながらに描き得るとは！ それはきっと私の面倒を見るように言い付かった精霊、そして今この暗闇の中で自分の預かった不幸な授かり物の嘆きを一緒になって負うてくれているのだ。も

洞窟の入り口が目に入った。その洞窟は技巧が凝らしてあるにも拘わらず、一見したところそう見えるように、自然の力が作ったようであった。豪華な大理石が、丸天井になっている最初の入り口を美しく見せるのに、全く都合よく役立っていた。足元の地面は鉱物を含んでいるように見え、タホ川が砂床に運んでくると言われているような、金色のきらきらした輝きを、地面の中に産み出していた。洞窟はかなりの広さの多くの部屋に分かれており、長いこと贅沢を身につけた自分本位の身勝手な人間でさえ、ここが最も寛げることがわかってきた。洞窟の間を小さな甘い香のする川が流れていた。その川は地表から離れ、この暗くはあるが心地よい館の中へささやかな道となって流れ込んでいた。その館が目に入るや否や、何歩か入り口の方へ歩きかけて、クレオフィラの憂鬱な心は、洪水のように押し寄せる自分の思いに負けてしまった。そこで、洞窟の入り口の最初の通路に腰を下ろし、最近詠んだ歌で、自分の苦い思いの丈を悲嘆に暮れて吐露した。その歌は次のような趣旨である。

嵐のごとく荒れ狂う暗き熱情  
(暗き熱情 美の光に陰らされて)  
反逆の咎に 幽閉されるは 暗き土牢  
だが今や 理性の光に導かれて

我が眼に<sup>よなこ</sup>光を投げるものは全て  
我が内に 暗き夢想を 生み養う  
我が内に 光りまたたく五感とて  
内なる暗き力を 募らせるのに多忙

暗き心と感覚の双方  
美の光に かくも貫かれ 哀れに傷つきて  
光は暗き恐怖を照らし得よう  
されど 不屈の暗闇 光に変えるは不可能で  
ゆえに 暗きこの場を 嬉しく思う  
光を慕う叶わぬ思い ここなら闇に紛れようて

楽器がないかわりに、クレオフィラの歌声は、両手を揉みしだいたり、倦み疲れた両眼を閉じたりで伴奏され、その大きな嘆息に胸が膨らんで美声が自由な本来の調べを奏でることが許されず、幾度か途切れるのであった。しばしの間自らの歌について瞑想し、悲嘆の弱さに落ち込んだ気持ちを奮い立たせ、所詮自分しか頼れない人にとって、一人で嘆いたところでどうしようもないと思い直したその時、どこか遠くから囁くような音が聞こえてくるような気がした。



レオフィラの希望はそこで途絶え、至福の時は危機に立たされるやも知れぬ。そこでクレオフィラは日々刻々と変貌する迷宮のようなおのが運命を思い遣って、しばし間を置いた。しかし公に対する自分の冷たさが公に引っ越しを考えさせるので、ここで自分からの好意が受けられるこの地を公が選ぶような顔つきで引き留めるのが、自分にとっての唯一の最上策だと心の中で覚悟を決めた。それ故、流し目を公に送りながら「本当によく言ったものですわね」とクレオフィラは言った、「老齡が激情を冷ますとは。まあ大公様ったら、傷つく前に怖がるのは早過ぎるというものですわ。小難しさは女性の本性ですわ、得難きは女の同意だと知らぬ訳ではございますまい。でもあなた様が得られると、私が同意するとも申しません。私が宮廷の虚飾で勝ち取れるですとか、相手の方が従者なく暮らすのを恐れて、その人にかしづく立派な従者を侍らせているからといって、それだけいっそう価値を認めると思われているなんて思いもしませんでしたから。」

貴婦人方には、バシリウス公がつつましかではあるが胸が喜びではちきれんばかりになり、つつましいが踊り出しそうな顔で爪先立ちされていたのが目に見える感じがなさらぬか——クレオフィラの言葉がそのような変化をバシリウス公に伝えたのだが。「あぁ、ヘラクレスよ」と彼は応え、「バシリウスが恐れていると！ 溶鉱炉で沸騰しているこの血が冷たい血だと！ あなたさまの存在を楽しむ間、誰と一緒にいてそれを気にするじゃろうか。あるいは、わしにとってよい場所とか悪い場所とかは、あなたさまがそこを祝福されるか呪われるか次第。あなたさまの温顔という武具でわしを覆っていただきたい、さすれば、わしに敵対するもの、敵対するやもしれぬどんなものにも太刀打ちできますぞ！ いや、いや！ あなたさまの愛は無敵、そして拙者、歳はとっても、まだまだ力がうせてはおりませぬぞ」。

クレオフィラは、大公の胃にあまりに過度の好意を食べさせることは良くないと思い、だから、当面は突然の隠棲生活切り上げをしないだけの十分な好意をバシリウス公は得たと見做して、彼に向かって恭しく頭を下げ、有り余るほどの彼女の親切さを大公がいかに程よく使えるかを確かめるため、今はお別れです、と告げて、踵を返した。

バシリウス公は（好意の一滴を洪水のように思い、元気回復したのだが）彼女をこれ以上悩ますことはせず、老人らしい謙譲で、自由な思いという美味な御馳走に彼女を委ねたのである。

バシリウス公から立ち去るとすぐ、クレオフィラは、再び親友のドロスに会って新たに辛い別れを惜しむことが出来るかもしれないと期待して、パメラ姫の別荘へと向かった。しかしまさにその別荘の近くまで来ると、クレオフィラは

らば陽の神フィーバスよ さらに麗しき聖者に我は仕えたい  
神聖な汝の英知が産み落とす 高邁なる観念さえ  
予は忘れむ 我が想いは かの聖女から決して離れない  
かの女に 思想の自由を宿す種が蒔かれるゆえ  
かの女の目に 予の日々の運命を読み取るゆえ  
さらばフィーバスよ さらに麗しき聖者に我は仕えたい  
汝は遠く その王国は天空の遙か彼方なる  
かの聖女は 地上に麗しの楽園を構え給い  
汝の光は好ましくとも 聖女の光は愛おしくなる  
汝の力を畏れるも 聖女の力は常に身に沁みる  
フィーバスよ譲り給え 我が心の統治権をば  
聖女がそれを有し 汝が聖像は壊されるに  
もし汝 激怒して大胆な復讐を謀るならば  
予の心の汝が神殿を破壊した かの女に  
汝が力で 我が恋の炎を識らしめよ かの女に  
聖女の美德が汝に優るその分だけは  
聖女の徳を賤しめ給え 予を愛する分だけは

「これがあなた様への予の讚美歌」と大公は言った、「祖先代々伝わったものではなく、予の心で生まれたものです。この歌が日毎に詠唱される神殿こそ我が魂。加えてあなたへと屠る生贄こそ、何を隠そう予自身なのです」と。

クレオフィラは（公の語りには薬の苦々しさと毒薬の効き目が常々感じられると思っていたのだが）、目に侮蔑の表情をちらっと浮かべて、それを色よい返事の唯一の証人に危うくしてしまうところだったが、その矢先にバシリウス公が勢いづいて、数えきれないほどの哀れっぽい嘆願の言葉をクレオフィラにまくし立て始めた。公は、自らをこの孤独な隠遁生活に甘んじさせた忌々しい影響力は今や過去のもの、その上暮らしはあまりに脆い守りの上のもので、自らが陥ってしまうであろう危機を昨今の騒ぎが教えていたというような思いの丈を思い切って打ち明けた。それ故、公は今、モンティネアの宮廷に帰ろうかと思ひ、宮廷でなら自らの持てるもの総てをクレオフィラに捧げたいとどんなに望んでいるかを、今以上にクレオフィラに示せるだろうと願っていたのである——私の筆が書き留めるのもうんざりの、その他諸々の蜜のような言葉と共に。

宮廷へ帰るといふ公の考えは、まさしくクレオフィラを貫かんばかりであった。クレオフィラの恋の欲望は、フィロクレア姫に関して得た幸先の良さに力を得て、クレオフィラはその欲望が完璧になるまで同じ道を進ませたからである。そして公の場に出ることで大勢の目にさらされれば、それだけ早く自らの仮面が剥がされるとクレオフィラはひどく恐れていた。そうなれば、ク

の湖を何とか渡り切ることができますように！」

ドロスは堰を切ったように溺れんばかりの涙を流し、友の手を絞るようにしっかりと握りしめながら言った、「いや、違うよ。僕の方こそ、不運が用意したどこへ導かれるとも分からぬ道を目隠しされたままで行くのだ。今となっては遅すぎるけれど、僕の予感では、僕たちの別離は決して幸福をもたらさそうにない。でも、もし僕が生きてテッサリアへ辿り着けば、直ちに軍隊を引き連れてここに戻るからね」。

こうして二人は長い間の付き合いを悲痛な想いで解消して顔色を無くしていたが（まず心に固く決めていたことは、たとえどんな不幸が降りかかってこようとも、決してどんな時にも互いの実名を口にしないということ——王家の名誉を護るためである——つまり、予め決めておいた偽名を使うことにして）、結局二人は別々の道を選んだ。ドロスは、隠棲別荘の方へと向かったが、そこでは、涙を孕む重い臉も幾分慰められるかもしれないから。クレオフィラは、バシリウス公の方へと向い、蔑むような微笑を浮かべながら独りごちた、「やっぱり僕の運命の女神は、御親切にも僕から陽気な仲間を完璧に取り上げてしまったという訳ではないんだな」。

バシリウス公は末娘のフィロクレア姫に尋ねて、自分の欲望が恋のどんな受領証を貰ったのかをクレオフィラ姫から聞いていたので、多少の慰めを得ていた。即ち、クレオフィラその人が快く受け留めてくれたということは、大公の恋の大義名分をクレオフィラは不愉快思っていない、と推量したのだ。さて大公は、随分捜し回ってやっと愛しい人の眼前にまで来たものの、心では疑念と欲望が壮絶な戦いを始めていた。先頃経験した一件から、大公は疑うことを学び、真の恋愛感情のせいで疑念は危険なほど膨らんでいた。それでも、欲望の働きが間もなく勝利を収めたので、大公は最も謙った態度にさえ甘んじることができた。「ああ、女神様」と大公、「あなた様に対して、予は最大の信仰心を抱いております。どうかアポロ神へ祈りの儀式を行ったことに立腹なさらぬように。アポロ神がもし全知であればご存じであろう。予の心が、目に見えぬ神に対してよりも、あなた様に対して遥かに大きな畏敬の念を抱いているということ。」

「陛下は、相変わらず、わたくしのことを誤解なさっていらっしやいますわ」とクレオフィラは応えて、「わたくしはアポロ神と競うつもりなど毛頭ございませんし、アポロ神への冒瀆がわたくしへの務めであろうはずもございませんから」。

するとバシリウス公は、したためておいた詩行を懐から取り出して跪き、クレオフィラへとそれを捧げた。その詩の内容は次のとおりである。

心から愛している者から離れていくという自分自身の悲しみが、また一つには、どんな状態のところにもせよ、彼がクレオフィラを残して行かねばならぬことから自然と沸き起こる苦しみが、ドロスの心の中に大きな葛藤を生んだので、彼は幾度となく、このひそかな企てを決して試みなければよかったのに、或いは、明らかにすることがなければよかったのに、と思った。

しかしクレオフィラは、今ではその企てがどんなに辛いものであろうと目をそらすことなく立ち向かっており、自信を持って決断し心を固めていた。「かけがえのない友よ」と彼女は言った、「そんなにも立派な目的に向かって、君の礼儀正しい三女神が君を導いているのだから、お互いの間の友情という儀礼上のことを考えて、そのことの障害にならないようにしようではないか。僕は君といると嬉しい。しかし君が成功するのを見るときもっと嬉しい。友の負傷よりも彼自身の傷つきやすさを優先するその友情は、恨みの果実を生み出す。僕に言わせれば、君との友情において僕の最大の悲しみは、僕がこれ以上君の役には立てないということだ。」

「クレオフィラ」とドロスは、まさに眼に涙を浮かべて次のように言った。「君に僕の決心を表わしたことが早すぎた、とは思わないが、まず、君の愛情深い判断を仰ぐべきだった。しかし、悲しい哉、君の優しい性質が僕をこれまでこんなにも惹き付けてきたように、君の優しい性質が今や、意を決している僕をますます強くする。だから、それ相応の賞賛が君に与えられるべきだ、愛情において僕を征服し、叡知において僕を愛することのできる君に。そして、僕はといえば、ピュロクレスが僕の魂に重要な座を占めることがなくなり、ピュロクレスという名が、心底から敬虔な気持ちで、僕によって崇められることがなくなれば、その時は、必ずや善が悪に変わり、忘恩が誠の心の印となるであろう。」

私が思うに、もしもクレオフィラが遥か遠くに老バシリウス公の姿を捉えなかったなら、二人の王子たちは、残酷な別れの一瞬や、「さようなら」と言う気まずい告別を迎えることは決してなかっただろう。大公は祭祀の生贄を捧げ終わると、クレオフィラを捜して至る所を彷徨い、やっと目当ての人を見分けられる所にまでやって来たのだ。大公は出来る限り最も好ましい表情を作り始めると、洒落た形に脚を交差させ、白髭をきちんと揃えて撫で付けながら、しゃきっと直立した。

「何て事だ」とクレオフィラ、「見てくれ、僕たちの悲しみに満ちた別れの不吉な前兆を。向こうに見えるのは、僕にとっては、復讐の女神の一人。毎日僕を苦しめる手合い。さようなら、お別れだ、ムシドロス。神々の御加護で、運命の女神が君の美德に侍女として仕えてくれますように。そして僕がこの悲惨

の言葉がご丁寧にも次々とその思いやりのなさを露呈する始末。クレオフィラは（彼女もかつて、いかに滑りやすき地面に自分の諸々の希望が立っているのか、そのくせフィロクレア姫に対する自分の思いがどれだけ届いていないのか、その思いがギネキア妃によってどれだけ妨げられているのか、といった同様の告白をしようと企てたのだが）、このドロスの最後の決断の言葉が注意深く聞いていた彼女の耳朶に触れたとき、驚きのあまり死んでしまいそうになり、しばらくの間声もなく立ちつくした。その際に悲しみのあまり敏感になった彼女の心に浮かんできたのは、彼女自身の運命の一コマ一コマであった。すなわち退屈なる憧憬、絶望の糧、バシリウス公の厄介で愚かなる愛、ギネキア妃の怒り猛った嫉妬心。そして従者を持たぬ王子でありかつ女性の持つ悩みに苦しむ男、愛されること忌まわしく、愛すること危険極まりないクレオフィラ自身であった。さらに今や、それら不幸な境遇すべての集大成として、かけがえのない親友が一人で自分の許を離れ、その喪失感に友人の不実さによって更に大きなものとなりつつあった。しかしすぐさま、クレオフィラは断固として内なる反駁を乗り越え、自分の願望よりも友人の利益を選んだ。冷静だが思いやり深い面持ちで、彼女はドロスにこう応えた。

「高潔なムシドロス、もしも僕が君へのこの愛を、僕自身の為に、抱いているのなら、そして、そんな友人に恵まれたことを自分の側のみで喜ぶがゆえに、僕らの友情が育ったのだとすれば、今僕自身の損失を心から悲しむあまりに、僕自身の悲しみによって友情の切れ目の幅を測りながら、君が僕から最上の慰めを奪うことがいかに残酷かを、天地にどうぞ御覧くださいと言うだろう。しかし、たしかに僕は君の為に君を愛しているし、僕の判断するところによれば、君の価値の高さは愛されるべきものなので、僕を楽しませてくれるだろう全てのものに別れを告げることに満足しているのだ。僕の喜びを君の慰めの上に築くことで満足している。だから僕の愛する君が幸せそうならば、僕は友情から来る幸運を偉大だと思うのだ。真の友情に対する唯一の報酬として、君はいつも僕を愛しているということを、ただあてにさせてほしい。だから続けてくれ、立派なムシドロス、美德を導き手として、運命の女神の助けを借りて。君の愛が愛され、君の願望は達成され、君の逃避は安全で、君の旅は難渋しない。全てのことが君の徳に合わせてその救いの手を差し伸べてくれる。思うに、君がいなくても君の姿は僕の目に焼き付いているし、苦悩によって君が僕を忘れていたりすることはない。また、愛に取りつかれた心であろうと、前々から定着した心は、永遠に君に与えられた場所から君を遠ざけたりはしないだろう。」

ドロスは、真の友情を発揮するには君のほうが一枚も二枚も上手だね、と鷹揚に認め、再び喜んで答えようとしたことだろう。しかし、一つには、自分が

理由なき拘束（この理由については父親の根拠のない猜疑心しか思い当たらないのだが）、そんな暮らしに嫌気がさしたことに加えて、ドロスの美德にパメラ姫が抱いている信頼であった。今やドロスとパメラ姫の二人は、忌々しい連中三人（彼らの中では愚鈍が疑念を生み出す）の不在を利用して、逃げ出すための好機を待つばかりである。「だから」とドロス、「愛する従弟（君に対しての友情を自然が生み、教養が堅きものとし、美德が永遠のものとした）、僕は人生の真の礎を堅き友情に見つけたのさ。君に僕と運命の女神の仲介者になってもらいたい。愛の強暴さは君も知らないわけではないだろうけれど、僕の今の境遇は君の心に憐憫を呼ぶことはわかっている。君からひとときでも離れねばならないと思うと、心の喜び総てが自分から抜け出てゆく心地がするよ！ 永遠の真理は、僕が臨終の苦悶すらこれほどひどく感じないと分かっていることの証人だ。でも満足を知らない欲望のこの魔力は、僕自身を越える支配力で僕を奴隷にしてしまう。もう僕には自分の決断の自由なんてないのさ。僕が思うのはただ、重荷とも思える至福をどうやってお連れするかということだけ。最愛の従弟、しがない僕が君としっかり結ばれている真の友愛の神聖な絆を、こんなまねをすることで僕が踏みにじっていると考えるのなら、むしろ僕にここに留まるよう厳命してほしい。ひょっとして君の命ずる力が僕自身の理性も与えることが出来ないほどの衝撃を僕の心に刻み込むかも知れない。神々よ御照覧あれ、〈ピュロクレスを見捨てる〉という汚らわしい言葉は、誠実なムシドロスの意に反するところだと！ それでも僕がいなくなることを君が許してくれるなら（僕がいても君には何の役に立つでもなし、これら二つの小屋は離れ離れで、君と一緒にいることはあまりなかったのだから）、いや、君にフィロクレア姫を与えることが必然の定めだとバシリウス公に（公が望む望まざるに拘わらず）気づかせるため、大軍をこちらへ派遣することで僕の不在が役に立つと考えてくれるなら（事実そうなるだろう）、そうすれば僕は心も軽く、今熱望しているこの企てに取りかかり、友の満足という至福の時の中で計画に着手したのだから、企ての半分は成し遂げられたと考えるだろう」。

しかしドロスの発したこれらの言葉は、かつて使い慣れた揺るぎなき流暢な修辞によって緊密に結び付けられてはいなかった。そのため彼の声は嘆息により途切れ、顔色は狼狽のあまり慌ただしく変化した——その内心は自らの過ちを十分に理解しているがゆえ、何とかして親友との流れる水の如き友情の習いを執り成そうとしているのであった。だが、ああ女々しい愛よ、お前は男どおしの心をつかんで結ぶどんな力を持っているのか！ 何度となく彼は自らの首尾よい結果や最終的な決断をパメラと下したことを打ち明けたいと望んでいたにもかかわらず、その心は決してその目的を遂げさせようとはせず、今や一つ

今や 心より求む港 この目に捉え  
今や 苦難の末 実を結ぶ花を咲かせた  
恐れは 情熱の力に<sup>お</sup>圧され 一層膨大に  
愛は懸念と 希望は恐怖と 闘うゆえに

最後の語を終えると、クレオフィラはドロスを腕に抱いてこう言った。「なあドロス、僕の収穫はまだこれだけ、商いのもうけはまだこれだけなのさ！ さて願わくば、僕らの冒すべからざる友情の名にかけて、そして（もし君の心にそれを煙にしてしまう新しい炎が生まれたのなら）麗しのパメラ姫の髪にかけて、ぜひとも君の愛の冒険談を聞かせて欲しい。想いに関しては僕に劣るだろうが、君は想いの報酬を受けて非常に大きく船を進めたのじゃないかい。」

「まったく」とドロスは顔色を変えて答えた、「残酷な教師は無邪気な生徒にほんのちょっとしたままごとを大層な楽しみと思わせるよね。大きな助けを必要とすればする程、小さな助けが一層大きいものに感じられる。長い間ひどい境遇に打ちのめされてきたせいで、僕らは自分たちの考えを希望ではなく力量でもって測るようになってしまい、悲嘆にはちきれんばかりの心は安堵の空気をほんの少しでも吸おうとして躍起になっている。僕は今、目指す土地から（計り知れぬ程）はるか離れた所にいて、けれど出港した場所からは随分前進したものさ」。それからドロスは、私がこれまで読者淑女の皆様方のお耳をわずらわしたかもしれないと気がかりであります冒険談の全てを、友に詳しく語って聞かせたのでした。いかにしてパメラ姫が、ドロスの外見上の身分不相応さのために、高貴な決意でもって彼と言葉を交わすのを決して承諾しなかったか、そして彼が示した愛の表明を快く思わなかったか、（自分のほうは疑り深く監視され、彼女はといえど厳しく護衛されており）彼が身を明かすには大変苦しい状況であったか、さらについにはモプサへの恋を装い、そちらに向かってパメラ姫に分かってもらえるあらゆる事を語ったか、身の上話をたてにしていかにパメラ姫の機知に応酬し、モプサの無知を愚弄したかを打ち明けた——そう、かねて私が御婦人方に説明致しました通りに。

さらにドロスはその時以来、パメラ姫の中にいかなる好意も欠けてはいないとはっきり分かったので、パメラ姫がドロスの身分の高さを認めたとしても（モプサへの求愛が相応しいか否かパメラ姫にうかがいをたてることをいまだ口実としながら）、パメラ姫がテッサリア公国へ無事到着するまでは無体なこととはしないという心からの誓いのもと、最寄りの港までこっそり連れ出すとパメラ姫と意見の一致を見た。パメラ姫がこの決断に至った最大の理由は、一つに、近頃父親が陥っていると見えるおかしい気まぐれぶり、そして娘の自由の

そのように 悲しみの心の巡礼の道中  
あらゆる徳を身に宿す聖人を 捜し求めるに  
嵐という嵐 苦難という苦難が 我を襲う  
それを知ろうとする者は 地獄を味わうはめに  
されど今や 苦しみをしのぐ成功 勝ち取り  
悲しみは この喜びに釣り合う重しとなり

「まったく」とクレオフィラは言った、「過去のあらゆる時代に人々がキューピッドの特性として挙げた多くの資質を考え合わせても、やつがそこまで素晴らしい吟遊詩人だとは今まで思ったことがなかったよ。自分の教え子をこんなに短期間のうちに、今の君のような音楽家に仕立て上げてしまうなんて。ところで僕の場合、運命の星々は完全に怒った顔をこちらに向けているのではないさ。けれど幸運に恵まれていることを吹聴し過ぎて嫉妬深い運命の神から意地悪されるといけないから、僕は君の喜劇的な音の調べをこのお馴染みの悲劇的な調子で混ぜ合わせることにしよう。そして君の希望が満月のごとく膨らんでいるところに、この僕の疎ましい懸念を雲のようにたれ込めさせてその希望を少しばかり陰らせてやろうじゃないか」。そう言ってクレオフィラは天に顔を向けて横たわった。その目はしっかりと一点に据えられており、その様子はその時のクレオフィラの視界に分別を向けさせるような対象など何一つ入らなかったであろうということがはっきりとわかる程であった。そうして絶え入るような声でこのように歌った。

ある商人 七海渡り 教わるは  
風の繩張に渦巻く恐怖や かくも凄まじき  
されど 岩や早瀬も及ばぬ脅威とは  
故郷も近き海原で 嵐や浅瀬に怯える時  
自然には あの決して挫けぬ目的が伴う  
最も失いたくないのは 最も近づきし希望

ある農夫 その疲れた体は  
労働を尊く思わす ため息ついては 変化に応じ  
されど 何にも増して気をもむ変化は  
収穫の時期の 心躍らす豊作の兆し  
されど理性は 期待の幸運 間近に迫るに  
喪失も多大にし 失う恐れも絶大に

そのように 大きな欲望の船の上で 翻弄され  
そのように 激しい愛の労働に 身を粉にした



いくら姫のお姿が君の目を釘付けにする程の力があってもね。君の心だって最も硬い鋼で出来ている訳ではないだろう」。

「じゃあ、君はそれが怖いんだな」と応じてクレオフィラ、「でもこれから先は心配無用。パメラ姫の星の光は、フィロクレア姫の陽光の下では霞んで見えないからね。ただ僕がどうしても知りたいのは、君がどんな保証を、あの気紛れな運命の女神の好意に取り付けたのかということ。聞いた話しでは、莫大な財宝を手にしたという途方もない夢を見た人達は、結局目覚めてみると、枕許の棍棒以外は何も手中に見出せなかったそうだよ。嬉しいことに僕は君が幸福だと確信している。だから思うんだけど、神々は余りにも人間に不公平過ぎないか。毎日目にするように、災いは明らかに感染してゆくのに、同じようにもしも或る人からその縁者へと幸運が密かに注がれて訪れるとなると、神々がそれを許さないのであればね。だから君の悦びが心の中で歌い出したくなるほどのものなら、今すぐそれを口にして僕にも分けてほしいんだよ」。

「あの悦びは素晴らしく」とドロス、「それ自体、不確かさなど被る余地なんてないし、不貞の危機に遭うこともない。だから実母のごとき運命の三女神に対して、その御好意を恩知らずにも忘れて蔑ろにするようなまねはさせないでくれよ。女神たちは僕に至福の綾織を紡いだ方々なのだから。僕は幾度も、悲嘆に満ちたこの心情を耳障りな調べにのせて、詩神方をうんざりさせてきたけれど、これからはこの悲しみに、もっと心地好い旋律で味付けしよう」。こう言ってドロスは羊飼いの笛を取り、それを響かせながら、最初は小鳥たちを誘って自らの曲を聞いてもらおうとしているようだったが、少しして笛を置くと、次のように歌うのであった。

ある商人 儲けに誘われ 海に出るや  
風の猛追 あげく迎えるは岩の塊  
波にもまれたその人 彼方に湾を目にするや  
そこに 目指す商いの地あり  
すぐさま 恐怖は忘れられ 苦難は過去のもの  
全ては 今の安楽を より味わい深くするもの

ある農夫 呪われた大地を 引き裂く  
眉に汗溜め 時折目を潤ませつつ  
時には灼熱の太陽 時には雲の陰りにおの慄く  
されど 苦勞の成果は 運の齒車の上に立つ  
収穫の時期 穀物が豊かに納屋を満たすと  
苦勞の分だけ 噛締める喜びもひとしおと

君が、するに事欠いて羊飼いに身を墮してしまうなんて、一体誰が思っただろうね」。

「そういう事を思いつく人はね」とドロスは言いかえず、「かつての君のような貴公子が、偽の娼婦に成り済ますなんてことを思いつく人さ。でもね」と続けて、「思い返してごらん。君にこれほど立派な戦利品を見せることができるかどうか」。こう言ってドロスが取り出したのは、パメラの手袋の片方。濃い赤紫色の絹織りの品で黄金の飾り紐があしらわれている。(嬉し涙を流しながら、それに口付けをすると)ドロスは手袋を再び懐にしまい、次の二連の詩を歌った。

麗しの手袋よ 我が密かなる至福の証人  
(それをかざして かの美女は 輝く瞳を護りたり  
其は差し延べられし 我が慰めの刻印)  
汝こそ 漆黒の夜を照らす我がきら星なり  
我が双眸を 常に眩ますも 尚見続けさせん  
かの女の朗らかなる太陽に逢えぬ限り  
麗しの手袋よ 汝は錨 我が心の  
我が脆き小舟 再びかの港を見出すまでの

麗しの手袋よ 麗しの戦利品 こよなく麗しき手からの  
美しき手よ さらに美しき心の 最も美しき誓いにて  
真の心 その真実は 至誠の絆に生きるもの  
至高の絆 我が心の玉座を繋ぎて  
心の玉座 そこに王として君臨するもの  
其は密かなる歓喜 天にも登る心地を我に分かちて  
一人の方に結び 我が惨状を常に斯く救い給え  
手袋よ 我が感謝を受け入れ 我に慰安を与え給え

「嗚呼」と、クレオフィラは友人が歌い終わると、しばらく間をおいてから言う、「君は喜びを十分に味わうこともできないんだね。まるでわざと自慢気に親友の悲惨の上を行軍するみたいに、是が非でも自分の喜びを利用してみないと気がすまないんだね。ずっと嬉しそうにしていればいいじゃないか、ドロス。でも善意から自分の幸運の殆ど全てを君に託している友にも、同じ幸運を願ってくれてもいいだろう」。

「同じだなんてだめだよ」とドロスは微笑んで言う、「フィロクレア姫から得られる幸運は君に惜しげもなく与えてあげるよ。でもお願いだから、アマゾンの女戦士の視線を、脇目も振らずにパメラ姫へと注ぐのはやめてくれないか。

真の眠りなど彼らにとっては及ばぬものであったからである。そういう状態ながらも各自寢床に身を横たえ（その間、思考の糧となる当の人を想って彼らの寂しさは極みに達したであろう）翌日の正午あたりまでそうしていた。その後バシリウス公はアポロ神への祈禱を続け、残りの者たちは自らの願望についてあれこれ思いを巡らすこととなった。

## これにて第二の牧歌終演

☆ ☆ ☆

## 第三卷または第三幕

恋の熱情に浸った夜が明けると、翌日が一緒に連れて来たのは、恋情を更につのらせるような新たな事態であった。心にしっかりと根を下ろした恋慕の情は、時々刻々と増すものなのだ。ところでその日の午後、大公はアポロ神への祭祀で忙しかった。クレオフィラは（親友ドロスと打ち明け話が出来ないことが心に重くのしかかる悲嘆の一つであったから）この好機を捉えて、最愛の従兄ドロスに呼びかけて例の場所へと赴いた。そこは一番最初にクレオフィラがフィロクレア姫への秘めた情熱を打ち明け、ドロスが（貴婦人方が覚えていらっしゃるように）友愛を込めた厳しきで、親友を咎めたその場所であった。二人は、甘い香りの花々に囲まれて（アルカディアは花がとても豊かに咲き誇る土地なのだ）幅広の葉が繁る一本の篠懸の快い木陰に腰を下ろして、お互いが経験した不思議な恋の巡礼について語り合った。心を許しあった友の間には、隠しておくような話題など何もなかった。友情には喜びと悲哀の両方を伝えるだけの根拠がある。実際に友情を最も甘美に味わうには、こうして互いに同情しあうか、慰め励まし合って二人の魂を結び合わせるのが一番だ。そうしていれば、塞ぎ込んだ精神も自らを全く惨めだと思わずに済む。不幸を心から同情してくれている人が確かに一人はいるのだから。また喜びに満ちた精神はそれ自体でも、また羨ましがられるような場合でも、喜びを損なうことはなく、却って信頼する根拠のある親友へとその悦びを惜しげなく伝えるのだ。そうすることで、きっと自分と同じ喜びが麗しく返ってくるのを受け取り（誠実な善意という澄みきった鏡に映るように）自らの喜びと生き写しの有様を必ず目にすることになる。ドロスとクレオフィラとの間では、愛しい姫君たちの美しさについて、また自らの一途さについて労りつつも口論が巻きおこり、時にはどちらの方がいっそう悲しい恋を経験していたのかを、得意になって言い争うのが常であった。

「ねえ、ドロス」とクレオフィラは言う、「僕に対して素晴らしい教師だった

美しき木々の織り成す木陰は 堅固な要塞  
危険は皆無 お前の身のうちに潜まぬ限り

おお美しき森よ 孤独の喜びを生み出すもの  
おお 何と素晴らしき その辺鄙さ  
ここに 無垢のヴェールを纏う裏切りは潜まず  
蛇のごとき妬みの視線 うろつくことなく  
おべっか使いの毒気に満ちた入れ知恵もなく  
狡猾な気紛れ屋の 訳のわからぬ諫言もなく  
高利貸の横行という 宮廷に典型の墮落もなく  
無駄話に時を過ごすことなく 無為を育む揺り籠もなく  
いわれなき義務や 奢りという邪魔物もなく  
人の目をくらます くだらぬ虚栄の虚飾もなく  
地上の楽園を印す黄金の 手かせ足かせもなし  
ここに 不正はその名を知られず 誹謗は怪物なり  
魂を中傷から遠ざけよ 中傷の住まいここにはあらぬ  
樹に欺瞞を接ぎ木する者など はたしていようか

おお美しき森よ 孤独の喜びを生み出すもの  
おお 何と素晴らしき その辺鄙さ  
いとしい土塊よ お主という館に閉じ込められた  
喩えて言えば 堇のごとく可憐 百合のごとく美しく  
杉のごとくすらりとし カナリアをもしのぐ声  
己の影で安全を確保 危険はそこを避けて通る  
その賢明さは 思弁が宿る程  
その善良さは 純真が他を制す程  
蛇のごとき妬みの視線 眼を閉じずば息耐える  
誹謗は口実を欠き 阿諛追従ははるか彼方へ  
おお もしかかる魂 ひとり隠れ住まうなら  
ここに嬉々と迎えよう その足跡 その視線  
その御方により孤独の損なわれんこと 案ずるなかれ  
かような客人 孤独を優美に飾るがゆえ

他の羊飼たちはさらに歌比べを続けようと意気込んだが、皆が宴に打ち興じている間にいつの間にやら夜はその出番のほとんどを終えており、大公もこの時ばかりはと皆を解散させた。そうして彼がクレオフィラを寝室に送ると（送られる当人は同じ事をフィロクレア姫にしてあげたい気持ちが山々であった）、一同それぞれ自分の寝床に就いて眠りを装った。というのも、あまりの苦悩に

この麗しき野営軍を一斉に進ませるは その両脚  
さあ理性よ お前の忠言はいかに

大砲となるは かの人の視線 我が眼は城壁  
最初の射撃に 城門は大きく破られ  
壘壁は崩れ落ち 頭は粉微塵  
思考を突き刺す一声で 土台はがたがた  
自ら弱まりしこの身に 助力はかけらも無し  
さあ理性よ お前の忠言はいかに

今や かの人の揺るがぬ榮譽の伝令たる あの名声が  
布告を言い渡す (人々の声を上げての喝采を背に)  
地上に住まう者の支配者 自然の女神は  
生きとし生けるものに 服従を命ずる  
この下に 自然の作なる 唯一のいとし子の下に  
さあ理性よ お前の忠言はいかに

理性はため息吐いて ついに答える  
「天の決め事につき 我如何様にもできぬ」  
されば自然の結晶よ 戦利品を受け取るがよい  
されば生粋の真珠よ 我 この感覚と魂 引き渡そう  
されば甘美な痛みよ 我 この身の持てる全て 引き渡そう

ドロスは彼が思うに長いこと、あらゆる栄光の備わる (彼にとってそう思われる) 御方の栄光の介添えとなるような言葉をあえて口にすることはせずに黙っていた。しかしこの時沈黙を破るべく、次の詩行をアスクレピアデス格にて歌った。

おお美しき森よ 孤独の喜びを生み出すもの  
おお 何と素晴らしき その辺鄙さ  
ここにありて 人 心のままに思い巡らす  
麗しき指令を授かる幸運について  
ここにありて 感覚は 天の軍勢を捉え  
思慮深き頭脳 その創造主は誰ぞやと 目を凝らす  
瞑想は ここに唯一の居場所を構える  
何物にも縛られることなく 希望の翼身につけて  
天の星まで登りつめ 自然界は遥か足元  
その静寂を破る物はなく 全てはお前に随従の身  
景色一つ一つが 思索を誘う (思索こそ 学問の母)  
可憐な小鳥は 惜しげもなく調べを添え

喜びはなく 名声は得られない

詩神よ何がこの熱情を悩ますのか？

「ああ」詩神は言う「私は汝のもの  
だから汝の痛みは私の痛み  
私の居場所は汝の激しい心  
その中で私は燃え立つ 汝の吐息は  
私の声 閉じこめておくにはあまりに熱い  
そのうえ ほらここに源が  
汝のあらゆる苦悩の源が ほらここにあの女が  
汝を癒すただ一人の女が  
私はその女に助けを請う」

詩神よ お前にゆずろう 詩神よ歌え

しかし汝のあらゆる歌はこの一点に結ばれる  
我々の送る人生は総て愛  
我々のいなく愛は総て死  
私は人生を満足させるものを何も望まないし  
死から逃れるものを何も望まない  
だが我が女神であり  
我が命 死であるあの女だけは その命を大切にしてほしい

バシリウス公はクレオフィラがすっかり歌い終えてしまったとき、地面に膝をついてひれ伏し、神々が現世の体をまとって奏でられたこの音楽が聞けるように命を延ばしてくれたことに感謝した。そしてクレオフィラに対して相応しい礼節を持って、クレオフィラが次の十一音節からなる歌を、(バシリウス公が差し出した豎琴を持って) 歌ってくれるまでは頼むことをやめなかった。

理性よ お前の考えを聞かせ給え

この勝手の違う闘いのさ中 抵抗するだけの理性ならば  
ここに 芳しき美の品々 美徳の連隊の堂々たる旗掲げ  
運命の冠で燦然と武装し 美により召集された一隊  
さあ理性よ お前の忠言はいかに

かの人々の乱れ髪は砲弾 乳房は矛となり

動作一つが偵察隊 両手は騎手

唇は 闘いを維持する財宝

その奥には 真珠の宝箱 整然と並ぶ

ああ 決して幸せなどではないのだ  
私の衰え果てた有様を歌うことなんて  
ああ 決して心地よくななどないのだ  
返事もないのに話すことなんて  
ああ 決して賢くななどないのだ  
癒しの術もない傷を見せるなんて

詩神よ何がこの熱情を悩ますのか？  
我が眼はかすみ 四肢は震える  
我が声はかすれ 喉はかれる  
我が舌はからまり 物が言えぬ  
我が想像力は戸惑い 思考は鈍る  
我が心は疼き 生气は失われる  
我が魂は肉体から 離れ始めている  
これら皆が強い激情を覚えているのだ  
私の傷を致命傷だと思い詰めるほどに  
私が無謀にも切り取るべきだと

詩神よ何がこの熱情を悩ますのか？  
汝が歌おうとするならば  
行って古のテーベの没落を歌え  
醜悪なるケンタウルスの戦い  
ヘクトールの人生、そして死  
汝の歌が名高きものとならんことを  
それとも汝が愛そうとするならば  
エウロパの凌辱を語れ  
アドニスの最期 ヴィーナスの恋の罫  
月が眠たげなくちづけをそっと盗む  
汝の歌が快いものとならんことを

詩神よ何がこの熱情を悩ますのか  
我が唯一の秘密を描き出そうとする熱情を？  
その秘密の中では榮えるのみ  
苦悩の哀れな果実が  
遺志の歌が  
調べは嘆きとなり 言葉は悲歌となる  
歌い手がその歌の主題であり  
その恋歌の中では耳は楽しまず  
眼は然るべき対象を捉えず

見て 我は屈したが 何が最初に射抜いたのか我が眼を	眼よ
眼は加害者で眼を傷つける だが眼から我が眼へ何が落ちる	墮ちる
最初に恋に落ちた時 何故大きな転落が訪れたか我が心へ	心得
心得? その心得とは何たるや 何を意図して汝は語り	語り
何が成果か語りの枝の 何が育つか 言葉から	言葉が
ああ言葉以上だ これらの言葉が我に与える傷の酷さはそれ程で	それ程でも
ああいつ分って貰えるこの心 あの人の分って欲しいとずっと願うに	ずっと先に
ずっとは その知らせで受ける苦しみ 如何ほど彼女は気に掛けたるか	
我の想いを	何の想いも
ならば我は何を得ん 彼女の跡をひたすら追うために	ため息
風 嵐 暴風雨 最後にかの女がこの願望にくれるのはどんな感謝	癩癩
愚かな報いよ! しかし女性の中でかの女こそが美德の華だ	はなはだ
どんな偉大な名を付けようか 天女の如きかの女に	禍の男に
禍か だが我には喜び それ程びったり一致する 我が想いに	我も想った
そう想うのは 我が切望する祝福の それが唯一の道程ゆえ	呪いゆえ
かの女への想いを呪う汝自身が呪われる 想いが我を導く それは喜び	空喜び
馨しき被造物とは何 つましい要求でさえ聞き入れてくれない	つれない
手に入れ難いが 貞節で 堅きこと鋼のごとし	得難し
どれ程つれなくし得るのか 語れ 少し覗いてきた光景	高慢
何処から高慢はそこへ来る 美の泉が溢れ出すのだ 彼女たちから	彼女たちから
恐ろしきはこの冒瀆 最も聖なる者に対してあの暴言	ああ虚言
汝 嘔吐き 偽こだま 彼女らの心は美德の如く誠実だ	誠実だ
揶揄するのか これらのダイヤは 唯一神々にのみ匹敵	晶屑
晶屑? 何のえこ晶屑か 彼女等を我は天国よりも選びたいのだ	大過だ
ならば再び我に教えよ 麗しき美女たちの名 働く悪事	悪魔
悪魔だと? 地獄にそんな悪魔がいるなら 地獄へと我は行く	行け

フィリシデスはそのこだまを詩の中に巧みにとり入れたことにおいて誉め讃えられたものの、人々の賞賛を歯牙にもかけなかった。フィリシデスには、自分が最も嫌悪されるところにこそ誇りの礎があったからだ。そんなわけで、フィリシデスはまたいつもの陰鬱な物思いの続きに戻ってしまったので、クレオフィラは誰も舞台にのぼろうとしないのを見て、自分の中で長きにわたって押し込められていた思いが今まさに牢から飛び出したかのように（自分の声がフィロクレア姫の耳にだけ調和するように欲しながら）アナクレオン格の詩に乗せて心の重荷を投げ降ろした。

詩神よ何がこの熱情を悩ますのか

我が唯一の秘密を描き出そうとする熱情を?



サー・フィリップ・シドニー

# 『オールド・アーケイディア』訳・注

## その4 [第二牧歌②及び第三卷①]

村 里 好 俊 / 杉 本 美 穂 / 道 行 千 枝 共

野 上 良 子 / 山 崎 英 司 / 岩 下 い ず み 訳

フィリシデス

劔

美しき岩々 麗しの流れ 馨しき森 だが何処に見ん我は平和を	平和を
平和を? 何が我が舌を結び 誰がかくも近くに寄るのか我に	我が
ああ! いかなる客人に逢いしかを我は知る 其はこだま	其はこだま
よくぞ逢えた こだまよ来たれ 汝が望みを我に語れ	我也語る
こだまよ 何が 我が魂にもたらすのか 悲しみを	悲しみよ
どんな薬があるのか 死へと至る苦痛に効くは	逝くは
ああ 毒薬よ! どんな悪い事態が有り得ようか それより	それなり
どんな様であったろうか この死の病に見舞われていると	易々と
どんな様子か あの気まぐれな恋へと至る精神とは	<small>いたずら</small> 徒
理性には十分な力がないのか 欲望を咎めるだけの	確かめるだけの
屢々試してみるが 何が癒す 理性が消えようとするうちに	<small>いら</small> 一に
ああ! 其の物は何 何が癒すと成り得ようか 我が恋の	恋
恋人は何を捜す 久しく捜すは 喜ぶためか	喜ぶため
喜びとは何? 恋人がそれを求めて陥るは苦惱	苦惱
ならば誠の恋人には 何が最高の勝利を供する	了する
了す? 我は終らぬ 愛神は我に与えぬ 少憩さえ	去れ
汝の薬を味えぬ精神は どんな状態になるのかい	不快
与えよもう一度 病への忠告を 我が汝に語った処の	我は汝に語った
恋を患う惨めな者は 極みを知るや	否や
だが障りを知らねば どんな手引きを受けられようか 盲目で	盲目だ
見えぬ手引きを受けられようか 頼りにするのは空想か	空想さ
空想には目がないのか 幻の階段を登ろうとして落っこちる	よく落ちる
何が因で まず苦痛が我にふり落ちたのか ふわりと	浮薄
因がそんなに軽いのに 人を死へと追い込めるのか	可
ならば教えよ心底のどれ程軽いものが 死へと引きずるこの身を	見よ